

ることであらう。

それはとに角、教育は明日の社會が幾許の人材を如何なる方面に必要とするかといふ、計畫に基づいて實施されなければならぬ。もとより社會が必要とするこの方面とは、東亞共榮圏の確立、發展に邁進しつつあるわが國の必要とする方面であり、従つてこの方面の充實は、自ら國防的意義を有することはいふまでもない。その意味でこの計畫教育は、國防教育と必然的に結合するのである。

終りに、國防教育は今日の情勢の下では、單なる軍事教育ではない。國家が國防國家でなければならず、その國防も従來のごとき防衛の域を脱し、積極的な東亞建設によつてのみ、達成されるものであつてみれば、國防教育は自ら東亞建設者の養成をめざす、國民教育と同義のものにまで擴大されなければならぬ。むしろ國防教育即軍事教育とするやうな理解を拂拭する事こそが今日の急務である。

## 第二節 科學教育論

—

問題はそのとり上げ方の如何で解答が随分違つて來る。然るにある問題が社會的にとり上げられるといふとき、そのとり上げ方は多くの場合偶然的で、問題の解決の要求する論理的必然性はこれを持ち得ぬのが普通である。論理はいつも後からついて行くものである。今回の科學教育運動にしても、かうしたことが注意される。即ちそれは、科學の本質から考へてみて、これを國民生活全體に滲透させるにはどうしたらよいか、といふことから出發してゐるのではなしに、國防の必要、分けても武器の高度の機械化に伴ふ國民の技術能力向上の必要、更に生産力擴充の基礎としての科學技術の向上の必要、就中技術資源の國際的鎖國状態に對應す



るための國內科學陣營の充實の必要といふやうなところから、この運動は推進されてゐる。素よりこの運動が進展するにつれて「科學する心」といふやうな合言葉も生まれた程に次第に一般的な科學の發達といふことが念慮されるやうになつて來つゝはあるが、それでも尙當初の社會的必要といふ出發點に拘束されてゐる點は覆ひがたい。それはとり分け次のやうなところにあらはれてゐる。即ち科學が何よりも自然科學として、就中生物學や鑛物學などではなしに物理化學的科學として取上げられ、科學教育の目標は機械化的能力の向上にありと考へられてゐるところに現はれてゐる。即ち科學教育のために重んずべき事柄として、どんなことでも數量的に扱ふやうに心掛けさせるといふやうなことが獎勵されてゐるのもこれに依るのである。

併し科學がこのやうな觀點からだけとり上げられるといふことは、科學自體のためにも好ましくないし、のみならず國家今後の使命を達成する上からいつても

十分だとはいへない。科學教育はその將來の發展のためにこゝで一の反省を行はねばならぬ時期に到達してゐると思はれる。

## 二

こゝで科學とは何であるか、といふやうなことに就いてことごとく書き立てようとは思はない。併しそれがどんなものであるかを一應はつきりさせておかないと、今後の議論に差支がおきる。ことに今のところ科學に就いての觀方について、例へば科學に國民性を認めるものと認めないものとが確然と對立してゐるやうな場合には、これをはつきりさせないとその教育論にも甚だしい混亂がおきて來る。そこでとりあへず今後の議論に必要な程度で科學とは何かに觸れておきたい。

普通には科學は超國家的なものだとされてゐる。ロシア人の研究した植物學の



眞理はそのまゝ、日本へ持つて來ても眞理であるし、ドイツへも持つて行つても眞理である。ユダヤ人の科學にしてもさうである。こゝに科學が藝術、宗教、或は政治といふやうな他の文化と異るところがあり、これが科學の大きな強みだと考へられてゐる。これは確かにさうである。イギリスで正しいニュートンの力學の法則は我が國でも眞理である。この點では、明らかに科學は超國家的であり世界的である。

併し科學の妥當性の範圍の問題は必ずしもこれ程簡單なことではない。もつと複雑した事情をもつてゐる。

本來科學は理論の體系づけられたものと考へられようが、理論といふのは單なる論理とは違つて我々が疑問とするものへの解答である。我々の經驗する事實のうち、これまでの知識や體驗では判らないものへの解答、殊に組織的な解答である。それは決して我々の理智が、夢でも見るやうに、或は理智そのものの要求に基

づいて構成したものではない。あく迄も我々が現實の生活の中でもつてゐる疑問に對する解答であり理論である。

ところでこの疑問に就いては、己を空うしてこれを問はねばならぬといふことがいはれる。これはもとよりさうである。何らかの己があつては問はるべきものも問はれないでしまひ、従つて事態の眞相に觸れることも出来ないで終ることになる。そこで物事を問ふに當つては一切の豫想を捨てる必要がある。問がこのやうにして問はれるなら、解答は事態のあらゆる面に就いて悉く與へられるものともいへよう。併し忘れてならぬことは、そもそも疑問なるものが、自分の判らぬことを問ふといふ意味をもつことである。而もこの問を問ふ我々は様々の環境の中で生ひ立ちまた現在各、異なる環境の中にあつて生くるを餘儀なくされてゐる我我である。従つて我々から問が出るといふことは、この生活の中から出るといふことである。即ち問は我々が生活するに當つて問はれるのである。それ故疑問は



生活によつて一定の方向を豫め與へられてゐるのである。いはば問は常に一定の問ひ方をもつて問はれてゐるのである。問が一定の問ひ方をもつてなされる間であるならば、それへの解答も亦それが具體的であり適切であるためには、その問ひ方にふさはしい仕方では解答されるのでなければならぬ。かゝる解答であつて始めて我々の疑問は具體的な解決を與へられるのである。説法は人の生き方に對する説法であるが、それが効果をもち得るためには、對機的であることが必要である。人生といつても人によつていろいろの意味合ひがある。悩みにも人によつて違ひがある。説法はこの夫々の悩みに對し、機に應じてなされるのでなければ、効果はたとへあるとしても極めてうすい。同様に問への解答も問のもつ機に應ずる必要があるのである。

そこで科學に就いてであるが、科學はその本質上合理的實證的であるべきだといはれる。併し科學はさきにもいはれるやうに我々のもつ疑問の上に成立つ。從

つてその意味は科學がこの現實に對してもつ我々の疑問の中にひそむ機によく相應し、これを合理的に、實證的に、又客觀的に解明しようとするものだといふことである。それ故この合理とか實證とかいふことは、我々が疑問とする現實に對してのことで、直接に理論そのものに就いてのことではない。即ち理論自體として合理的であるとかないとかいふことがあるのではない。たゞ問題となつた對象との關係に於いてのみあるのである。理論は勿論論理的でなければならぬが、それが單に論理的であるだけでは、それが解明しようとしてゐる對象に對して合理的な解答となつてゐるといふことになるとは限らない。兩者は別個のことからである。それ故科學が合理的だといはれるのは、科學の理論内容が純理的、すなはちたゞ論理だけで出來てゐるといふのでは勿論ない。そんな科學はもともと科學としては存在しない。科學の合理性は我々の疑問とする現實の世界をよく實證的に合理的に説明してゐる點にある。科學のもつ客觀性とか合理性とかいふもの



がかうした我々の疑問とする現實に對しての事とすれば、その科學の眞理が本來  
妥當するのほもとより我々の疑問とするものの範圍に限られることになる。すな  
はち眞理といふ特別のものがあつてそれさへもつてゐれば、どんな事でも説明出  
來るといふのではなしに、眞理は始めから或る疑問となつたことへの眞理である。  
従つてその妥當性は嚴密にはこの範圍に限られる。これを他の範圍にも擴充しよ  
うとするものは、論理學上いはゆる不當擴充の誤謬を犯すものである。この點は  
十分明らかにしておく必要がある。科學はその理想はともかくとして現實的には  
このやうに決して存在し得る一切の事柄に妥當するやうな、いはゆる普遍妥當性  
をもつ眞理を探求しようといふのではなくて、我々が疑問とする現實に、探求の  
眼を向けるのである。從來は何の検討を須ひることもなしに、科學は普遍的なる  
妥當性をもつべきものと信じられて來た。併しこれは不可能なことである。

元來對象といふのは單にあるものではない。單にあるだけのものは、我々と關

係のあるなしにかゝはずあるので、それは或は眞實にはないのかも知れない。  
我々のそれに対する關係の有無が決つてゐないのだから、ないといはれてもある  
といはれても、何ともいへぬのである。従つてそれはヘーゲル流にいへば有でも  
無でもあるやうな有である。それ故かうした單にあるだけのものは到底學問研究  
の對象とはなり得ない。對象とされる以上それは我々が疑問として取上げたもの  
である。従つてそれは當然我々と關係あるものとせられてゐる。又かく關係あり  
とされるものであつて始めて我々の學問研究といふ活動の範圍の中に入り得るの  
である。かくて對象となつたものは、單にあるものではなしに我々と關係づけら  
れたもの、いはばこの或はないかも知れない單にあるものを、我々がはつきりあ  
るとしたものである。従つてこの對象とされたものは始めの單にあるものと  
は大部そのあり方が違つてゐる。殊にこの我々は一定の立場をもつ我々である。  
従つて對象となつたあるものには我々のいきがつかつてゐるのである。我々の氣



持（これは思想、感情、意志など皆含んでゐる）が映つてゐるのである。我々を  
とほることによつて始めてはつきりあるとされたのだから、それにははつきりあ  
ると云ひ切つた我々の影響の及んでゐることは否定できない。それ故このもの  
中には、幽霊と見られた枯尾花のていものがないとも限らない。例へば天文學  
が對象としてゐたものにも、時代によつて随分の差のあつたことは何人も知つて  
の通りである。或る時代には始めから天文現象が神の秩序、神の意志を現はした  
ものと思込まれ、豫め對象にかゝる意味をもたせてこれを觀察して材料を集め天  
文學を研究したのである。それ故この天文學が現代の物理學的な方法で調べてゐ  
る天文學とまるで違つた内容をもつてゐたことはいふ迄もない。併し今の物理學  
的方法で調べてゐる天文學の對象も、無垢のあるもの——可能な限りの一切の天文  
現象を悉く内容としてゐるとは必ずしもいへない。現在の我々が疑問とし得る限  
りのものを對象としてゐるのみである。前時代の荒唐無稽の天文學とても自分の

對象をこの上なく清淨無垢なるもの純乎たる天文現象そのものと思込んでゐたこ  
とは勿論である。

このやうにして科學の妥當の範圍にも自らなる制限のあるのは必須である。併  
しそれは決して科學の生み出した理論の悉くがかうした制限をもつてゐるといふ  
のではない。その研究によろしきを得れば、取上げられた限りの對象の神髓に迫  
ることは勿論可能である。またかうして得られた研究の成果に基づいて更に對象  
の構成そのものを検討して逆に我々のもつ見方に反省を加へ進んで對象の再構成  
をも可能ならしめる。もしもこのやうなことに成功し、いよいよその精緻の度を増  
して行くならば、理論はますます妥當性の範圍を擴大して行くであらう。科學が  
今日その成功を各方面に誇り得てゐるのは、かうしたためなき研究の賜である。  
人々はかうしたところから直ちに科學が普通妥當性をもたぬのは、それが眞の  
認識に到達せぬからである、科學がこゝにまで進むならばその成果は當然普遍性



を持つと主張する。併し科學はあるがまゝの世界を對象とするものではなしに、問題となつた限りの世界を對象とするのだから、その成果たる理論に普遍性のある場合があつても、その普遍性は必ずしもこれを研究した我々の立場を超えて絶対性を意味するものではない。この理論の開示するところが直ちに我々とは無關係にある、あるがまゝの世界の構造を示すものだといふことにはならない。人間に絶対的完成なるものの存在せぬ限り、疑問のもち方即ち對象の構成の仕方また研究の仕方は常に相対的であるから、このあるがまゝの世界の構造は、我々にとつて嚴密には永遠に未知なるものである。我々の理論の相對性は、たとへそれが絶対性を探求しようとするものではあつても、遂に免れることが出來ぬ。たゞ問題のとり上げ方に共通なるもののある場合に、普遍性が生ずるのである。それ故理論のもつ普遍性は限られたもの、相對的なるものであるばかりでなく理論がそれ自體の必然性として齎したものでない。いはばある理論が普遍的妥當性をもつ

かどうかといふことは、それを生んだ科學にとつては偶然のことで嚴密には理論は、その科學が對象とする世界に於いてのみ妥當性をもつのである。これは今日の科學と雖も亦免れぬところであらう。それはとにかくとして科學はかうした限界をもつものである。

## 三

簡単にこれを具體的な例に就いて考へてみよう。先づ我が國が世界に誇る學問の一つである和算であるが、これは微積分や球面三角などさへも研究して、當時の洋算に比しても遜色なき程の發達をとげたものといはれてゐる。この和算家達が苦心の結果算出した圓周率や點竄の術はもとより今日でも正しい。もとよりその正しさは洋算に於けるものと必ずしも同様ではなく、また迂遠ではあるにしても、正しさには變りがない。一の立派な數學である。併しその算出の仕方や點竄――



代數の構成法は洋算の場合とは明らかに違つてゐる。これはどうした譯かといへば、あるがまゝの數の世界そのものに變りのあらう筈はないのであるが、對象となつた數の世界としては、和算家の場合と洋算家の場合とでは大きな違ひがあるからである。

和算家たちが盛に活動したのはもとより徳川の初期からで、それまでに商工業或は農業も相當に發達し、軍事技術や築城術も進歩し、水利事業や封建制の確立に伴ふ檢地も行はれるといふ時代であつた。即ちかうした時代の社會的要求が數學の發達を必須ならしめたものといつてよい。併し我が國の場合にはヨオロッパの十七八世紀に於ける數學の發達の場合とは違つてこの時代には何ら見るべき自然科学の發達がなかつた。従つて和算家の活動はヨオロッパなどに於いてのやうに物理學、機械工學などと密接に連絡されるといふことはなかつた。

そこで和算家たちにとつては、數の世界が自然科学の世界と結びつくこともな

く、自然の諸秩序と關係づけられてゐるといふ思想にも中々思ひつかれなかつた。また機械的技術がこのやうに未成熟であつたといふことは、數學の必要を極めて限られたものとしてしまつた。數學を誰でもが自由に理解し自由にこれを應用するといふやうな形には中々ならなかつた。そのため和算は誰にも解りやすく體系的に組織的に組立てられることなしに、その道に入つて長く研究するうちにその何であるかが判明するといふやうないはば未組織のものであつた。かうしたところから今日多くの研究者から指摘されてゐるやうに和算は體系的學問といふよりは具體的な計算の術として(所謂學問のやうに組織化一般化される事なしに)發達して行つた。この點が明らかに洋算と異つてゐる。それといふのは和算家にとつて數の世界が常にかゝる意味をもつたものと觀ぜられ、普遍化し公式化するといふ洋算的扱ひをするよりも、數の扱ひは日常身の廻りの計算の術として、或は多少ともあれ一種の觀念的な遊戯としてなさるべきだといふ風に思込まれてしまつ



てゐたからである。和算に、均しく數學であり乍ら、論理性が乏しいといはれるのはこれがためである。元來論理性を與へるといふことは一般性を與へることを意味してゐる。従つてこれが和算に必要となるのは、これを人々に組織的に且つ急速に納得させようとする場合であるから、數學の必要性をそれ程激しく感じてゐなかつたやうな時代には、論理的に體系づけることをせずとも、個々の場合に就いて説明して行けば、それで十分であつた。こゝに和算が洋算のやうな體系をもつに至らなかつた理由がある。併しこれは決して和算が學問でなかつたといふことを意味するのではない。たゞ洋算と異つてゐたことを示すのみである。

このやうに數學のやうな對象の極めて抽象的な學問でも、數が何と受取られてゐるかに依つてかくも大きな相違を來すのである。

科學のもつ限界―それは決して純粹にももの世界を研究するのではなく、我々によつて問題とせられた限りのもの、の世界を對象として研究するものであること

はこれで明らかであらうが、これはヨオロッパの方についても見られる。ヨオロッパで數學が體系的な學問として發達したことは右のことから推察出來ると思ふが、更に少しく補足しよう。

先づ誰でもいふことであるが、平面幾何學や三角法がエジプトで發達したのは、ナイル河の氾濫に依る。即ちこれは氾濫の結果必要とされる測量が、いろいろある數の世界のうち特に平面的幾何的な又三角法的な數の世界を問題とし對象として發見したに依るのである。エジプト人が一般的に廣く數の世界そのものを對象としつゝ、先づこれらを生んだのではなしに、そのやうなたゞ測量と關係のある數の世界だけを對象として見出したのである。そのために平面幾何學や三角法そのものとしては相當程度發達しながらも、あり得る他の數の世界を對象としてもつてゐなかつたために、即ち研究の角度が限られてゐたために數學全體としては發達が途中で止んでしまつたのである。



自然科学にしても、近世初頭にガリレオの物理学が振子の運動についての學として成立したが、これは當時盛に行はれた時計の製作が、數ある物理現象のうちまづ振子の問題を疑問とさせ、これを物理学研究の對象としたからである。またヨオロッパ自然科学の中心をなしてゐる機械工学の成立發展も同じやうな根柢をもつてゐる。ヨオロッパは十八世紀に産業革命を完了して飛躍的に東亞に進出して來た。所謂大量生産を武器として、從來の略奪のための植民地經營を市場のための植民地經營に進め、その限り平和的な紳士的な装ひで、併し東亞その他植民地の犠牲に於いて、資本主義を成立發展させ、その帝國主義的侵略を擅にして來た。またこれによつてその工業發展を飛躍的なものとすることも出來た。工業技術の發展がこれに伴つたことはいふ迄もない。その結果人々は數々の機械工学上の問題を發見した。機械的操作に使用される材料にも生物のやうな疲勞の現象のあることが發見され、例へば鋼鐵のやうな極めて弾性に富んだ材料でもその弾性を消失して行くことが明らかとなつたのである。これなどは到底蒸氣機關の發明された許りの十八世紀などで問題とされ得るものではなかつた。機械はまだ疲勞を覺える程に働かされてはゐなかつたのである。従つてこの當時の機械工学が、この疲勞の問題を發見した現在のそれと著しく異つたものであつたらうことは想像に難くない。

また今日では物質構造に就いての研究が盛んであるが、これとて現代の非常に發達した電氣工業なしにはあり得ないであらう。この研究の問題とするところ、またその實驗に要するいろいろな施設は、この工業的發展をまつて始めて可能なものだからである。

このやうな次第で一般に科學は、單にあるがまゝの世界を對象として純粹に論理的な方法で研究するのではなしに、我々が疑問とし對象として發見したものを觀察實驗して研究するものである。従つてその研究方法は必ずしも純粹に論理的



ではなく、そこには我々の今の物の感じ方、観方が何らかの形でこびりついてゐるといつてよい。すなはち科學には、その對象だけでなく、研究方法の點からしても、研究する我々といふものがいつも纏りついてゐる。科學の正しさにこゝから限界が出来るのもやむを得ない。併し先きにもいふやうにこれは決して科學に普遍的な妥當性が全く許されないといふのではない。科學的研究の結果にさうしたものであることは事實である。たゞ我々はかうした普遍的な妥當性をもつ理論も、右のやうな限界をもつ我々の研究の結果であり、従つて對象の選び方、又その問題とし方を變へれば、その理論も別の表現をもち得るだらうし、またたゞそれだけの内容ではなしに、それに伴つてより多くの内容なり法則なりが發見されることもあり得ようといふのである。要するに我々は、こゝで今日我々はその壯大な構成とその偉大な技術的所産とに驚異する機械的科學も、それ以外の形をとることの出來ぬ、可能なる唯一の科學ではなしに、本來理によりて立ち、且つ十七

八世紀以來歐米で發達した資本主義、従つて主としてアジアへの侵略を基礎として發育したヨオロッパ的社會に於いて、疑問とされたことがらを對象として成立した一の科學であり、従つてその發見する眞理も唯一の眞理ではなしに、これ迄疑問として來たことを解決するための、一の理論にすぎないことをいはうとするのである。従つてもしも我々が我々の生活を變へるならば、現在の科學の遺産を相續しつゝ、更に視野を廣くして（生活が變つて問題とするところに新たなるものが出來れば、それだけ視野は廣くなる）更に大きな發展をとげることにも可能になつて來る。現代がまさにかうした時期であることは、ヨオロッパ的體制の批判克服が我々の任務として遂行されてゐることに想到すれば直ちに了解出來よう。

科學をこのやうに、我々が問題とした限りのことがらを説明するための科學であると解釋すると、科學は非常に主觀的なものとなり、主觀の如何によつてその内容の違ふものとなり、これは相對主義であり不可知論であると貶せられもしよ



う。併し我々は眞理が絶対に不可知だといふのではない。それは我々に判つた限りの、我々によつて表現せられた限りの眞理たるに止まるといふのである。表現せられてゐない眞理は、これをあるといつても意味なきものである。そして表現せられる以上それが常に一定の装をもつことはまた必至である。何ら異とするに足らぬ。このやうな意味で科學は主觀的だといふのである。

ところで主觀は時と處によつて種々な相違をもつてゐる。同じ國家でも時代によつて根本的な差があるし、また同じ時代でも國々によつて非常な異同がある。こゝに於いて科學もその史的發展をもつしまた各種の類型的性格を有するのである。かう考へて來るとよくいはれる、科學者には國民性があるが、科學そのものには國民性がないといふのは正しい見方ではなく、科學そのものにも國民性が現はれるのである。併しこれがその成果たる理論に一應の普遍性の生ずることを否定するものでないことは先きにも述べた通りである。それはともかくとしてこの

やうに科學に對する我々の主觀のもつ役割が重大であるとする、科學振興のためには先づ我々自身を整へることが重要なこととなつて來る。もしも我々が尊大にして他を顧みず、己を空うして事物に接する謙虛なる態度を缺くならば、それはペーコンのいはゆるイドラにとらはれたる態度であり、事物の眞相に徹し得るものではない。かくして科學振興の基本方策は、何よりも先づ研究の任に當るを匡す我々自身にあるといふべきである。

然るに我々の精神の根幹である我が國民精神は奉公の精神であり、隨順の精神である。己を空うして仕へまつる精神である。もとよりこれは根源的には大君に仕へまつる精神であるが、併し奉公の言葉は個人間の關係にも移し用ひられる程に普遍的であり、我々の身についたものとなつてゐる。この精神が自然界に向けられるならば、それが自然への隨順の精神となる事は當然である。これは今日までの我が文化史がよく示すところであり、その成果に、今日のいはゆる科學的



見地よりしても極めて科學的なるもののあることは既に一般に指摘されてゐるところである。例へば建築の方面に於いて地震國であり乍ら五重の塔が千年の寂韻を傳へて聳え立つてゐる。又古めかしい藁葺の家が新築の洋式家屋の多くを吹き倒す颱風の中に泰然として一つの破損を受けることなしに残つてゐる。これらは明らかに我が國の自然への隨順の精神がよく科學的能力を發揮して我が風土に適應した建築様式を發見したことを物語つてゐる。即ちこの自然に對する細かなる愛情をもつてする我が國の隨順の精神は、あく迄も自然に忠實であり、その眞實に肉迫しようとするものであつて、實は最も科學的な態度である。そこで我々はいよいよこの國民性を鍊磨し發達せしめることが、國民性をいよいよ科學的ならしめるものと考へ、かくすることに依つて最も科學的なる科學を建設し得ると信ずる。要するに科學的性格の鍊成と國民精神の涵養とはその根本に於いて一致するものといふべきである。

科學のもつ國民性はたゞ自然科學に限られるものではなしに、他の社會科學文化科學などに於いては殊によく現はれてゐる。それはこれらの科學の對象となるものが、自然科學とは異つて生きた人間だからである。生きた人間であれば、單にあるがまゝの世界を我々が對象として促へたといふ關係以上に對象自體が、我々のもつてゐる性格なり限界なりを直接に表現してゐるからである。自然科學の方はこの限界が間接的であるために、これがないやうに思ひ誤られるのである。

#### 四

科學がこのやうにこれを研究する我々によつてその内容が決定されるといふことになると、科學を如何に振興するかに就いて我々の心構への如何が重要なこととなつて来る。従來は、たゞ純粹に對象——これは我々とか、はりなしにあるものとされてゐた——を捉へればそれでいゝとされてゐたので、我々の精神的態度



には一向注意が拂はれなかつた。捉へただけの自然法則を利用して更に深く自然に迫ればいゝと考へられてゐた。そのために随分好ましくない結果も起きて來てゐる。

先づ科學的迷信といふのがあつた。我々の發見した自然法則を、我々の問題として得た限りの自然界の法則だといふことを忘れて、何でもこの法則をもつて處理して行かうといふのである。そしておどましくも人々は自然の征服などといふことを考へ出す。世には科學で解決の出來ぬものは何一つとして存在しない。未解決のものがあるのは、まだ十分進歩してゐないからであると信じこんでゐる。自然現象に對する敬虔な感情などは完全に霧消してしまつてゐる。近代文明の缺陷はこゝにある。併し多くの知識人はこれを合理的な精神と稱して歡迎してゐる。自分たちの發見した理窟のまゝに動くのを合理的として尊んでゐる。而もその合理といふのは、自分の勝手に見つけた理窟に合つてゐるといふだけの話であること

を忘れて、可能な一切の理論に適合してゐるものなるかの如く思ひ上つて了つてゐる。現代人に信仰心が薄くなつてゐるのはこれに依るのである。「お天道様に濟まない」とか、「勿體ない」とかいふ床しい感情は次第に乏しくならうとしてゐる。かくて我々の生活は極めて索寞とした、また機械的功利的なものになつてゐる。その結果は我々の生活から敬虔といひ謙虛といふ感情は失せて、一身の利得、都合のよしあしだけが中心となり、悪いことをしても見つからなければまあかつたと思ひ、假りにこれを責めるものがあるとしても、法律のことを除けば、ただ自分の良心だけに、道德だけになつてしまつた。併し良心や道德はあくまでも自分の良心であり、自分の道德である。うまく理窟をつければ何とか胡麻化されぬことはない。この點神々の御照覽遊ばす事を信じてゐた近世科學以前の人は、何としても欺き得ない神の存在を身近く感じてゐた。その行ひに現代人よりも誠實があつたといはれるのも偶然ではないと思はれる。近世のかうした考へ方



は勿論ただこれだけに基づくのではない。自由の誤つた觀念の影響するところも少くはないだらう。自律を尊ぶことの結果、恣意をも誤り尊重することになつたのである。

近世科學の不幸はたゞにこれだけではない。我々が國民として意圖するところを實現する上に問題となつた限りの自然を忠實に研究するといふよりも、これを克服し利用しようとした結果、我々の生活の科學化といふ言葉の下に、この國民的意欲の主體である我々の生活の確立強化といふことから全く無關係に、これをただ我々の生活に科學的利器を攝取することだと考へるやうになつた。それだから電氣が細い線を傳はるときに抵抗のため熱を出すことが判れば直ぐこゝから電熱器といふものを作り上げて、我々の私的生活の安易化といふところにもつて行く。蒸氣の利用が出来るやうになつても同様である。また毛織物が出来るやうになれば立派なシャツを作り出す。發動機の發明は自動車の製作となつてついそこ迄行

くにも用ひられる。また酵母菌の發見は直ちに運動不足で心身薄弱な者をして安んじて運動不足ならしめる消化劑の發明となつて行く。このやうに現代の科學は、國民的意欲の主體たる我々自身を合理的科學的に強化するために、我々の身體を鍛へるより先きにこれを利用して生活を安易ならしめようと企畫する。その結果我々の足は弱くなり皮膚にも抵抗力が少くなり、内臟機關もその機能が次第に低下するやうになる。生活條件が最上であり得る上流階級の子弟に虚弱兒童の少くないことは勿論この結果である。これはたゞ我々の體を虚弱にするばかりではない。精神をも怠惰なものとする。困難に耐へることが少くなる結果、強固な意志と努力心とは次第に乏しくなつて行く。科學製品の普及した都會に精神薄弱者と神經衰弱者とが次第に増加して行くのは何ら不思議ではない。のみならずこゝにこそ近代科學の本質がある。

しかも近代科學のもたらしたこの結果は、綜合性を缺いた専門化と共に、我々



を具體的な自然から引きはなすやうになる。薄弱となつた心身にはもはや積極的に自然の懷に飛込んでその何たるやを尋ねる氣力も失せ、餘りに高度化した専門は、自然の具體的全體を捉へる能力を缺いてゐる。かくて例へば専門的には能く發達した醫學その他各般の科學をもち乍らも現代は類似宗教の簇生を見てゐるのである。それらの殆ど凡てが醫療類似のことをやつてゐることはいふまでもない。先きのやうな理由で誤つた近代科學の恩惠によつてもたらされた神經衰弱は、醫者や藥の手では治る筈がない。素朴でもあれ人間の機微をつかんだ全體的綜合的把握が必要である。これは近代科學人の能力外である。こゝに類似宗教發生の素因がある。而もこの綜合的な把握力は科學の研究に不可缺のものである。綜合的に觀察されて始めて、本來綜合とは視野の綜合性なのだから、それ迄の觀察の缺陷も補はれて研究は圓滿に進行するのである。科學的製品の享受に慣れ、専門的科學知識を一杯につめこまれた頭腦からは、この能力は次第に失せて行く。ともあ

れ我々はこのやうにして餘りに科學的となつた結果、次第に科學から縁遠く自然からも離れるやうになつた。この境地から脱して國民の眞の科學的性能をとり戻すためには、我々自身を出來上つた科學製品の私的消費の中から解放し、それを通じてのみ外界をみて來た既成の所謂科學の皮膜を破棄し、現實に直面する以外に途はない。極端にいへば我々を既成の科學から解放し、スチームもストーブもこれを奪ひ去り、毛のシャツはこれを引きはがし、寒ければ皮膚を鍛鍊させ、自動車はこれを召上げて何里でも歩ける脚に鍛鍊することが必要である。これによつて人々は往時のやうな逞ましい氣力を回復し得て己が意欲を實現せんために必要あらば自然探求にも努めよう。單に人の造つてくれた學問を享受するだけでなしに、自らの眼をもつて自らの手をもつて自然を觀察するやうにもなるであらう。こゝに新たなる科學の發展も可能となるのである。従つてこれをいはば新たなる科學の發展のためには人々から彼等のもつてゐる科學(的製品)を奪ひ去ること



がその捷徑である。丁度今日文化の全般について、文化をしてその本質である國家の欲求にもとづいた生々潑刺たる發展をなさしめるためには、頽廢的な文化至上主義的フランス的文化の絶滅が必須であり、かくしてのみ國民の心情の中に湧き上る野性的でさへもある建設の意欲とこれを實現するによく協力し得る知性が育て上げられるのと同様である。

我々は何ら躊躇すべきではない。藥を飲むことをたのしみ、煖房することを知つて鍛鍊することを忘れさせる近代科學はこれを即刻破棄すべきである。我々の生活が科學的であるとは何ら我々が科學製品を利用することではなしに、我々があくまでも率直にあるがまゝの自然の世界に飛込んで、その中から豊富なる問題をつかみ出し、これが解決に専心することをさすのである。これには我々は既成の如何なるイドラをももつてゐてはならない。あくまでも謙虛に、あくまでも敬虔に、またあくまでも隨順に自然に接しなくてはならない。即ちこゝに先きに述

べたところからも知られるやうに、隨順をもつて本質とする我が國民精神への徹底が、科學教育の見地からも要求されるのである。かくしてのみ我々には眞の科學的進歩が與へられるのである。

それ故、近頃よくいはれるやうに、科學の振興のために國民一般の科學的常識を昂めよといふ聲には大いなる検討が必要である。もとよりこの常識は必要である。併しドイツ人の下婢でもが知つてゐる寒暖計の使ひ方を、我々が單に日常化することによつて與へられる科學性は、既にドイツ人がもつてゐる科學性の粽粕をなめることではあつても、それを超えた科學の進歩をもたらすものではない。科學的常識を昂めるといふのは、科學の成果を右から左へ、左から右へ移轉させることである。移轉させただけで科學の創意的發展を期待する事の不可能なのはいふ迄もない。丁度武道の常識が昂つただけで劍道や柔道の達人が生れる譯のものでないのと同様である。科學教育にとつて必要なことは、科學的知識を注入す



ることよりも、科學探求能力を鍛へることである。勿論注入の必要が全然ないといふのではない。注入するならば鍛へるに必要な限りに於いてまた鍛へることを通じてせよといふのである。例へば平面幾何學に就いて公式や定理を教へなければ研究させることは出来ない。最少限度のものはどうしても與へねばならない。併し教へただけでほんとの幾何學的能力が出来たことにはならぬ。直角三角形の斜邊の平方は他の二邊の平方の和に等しいといふことは我々でも判る。併しかうして判つた我々の判り方は、これを發見したピタゴラスの判り方と決して同じだとはいへない。ピタゴラスがこれを發見する迄の苦心が我々のものとなつてゐて始めて我々の判り方は、彼の判り方のやうにより以上の定理の發見に進み得る判り方になるのである。創造的な判り方になるのである。従つて右の定理を知識として常識として一般化することは、それがたゞそのことだけに終るならば何ら必要ではない。却つて自らこれを問はずにをれずこの問ひの解決に邁進する心情の

鍊成が科學教育の根幹である。こゝでも問題は我々の心意にあるのである。これは科學のみでなく、人事の凡てにかゝはることである。例へば佛敎の敎にしてもいろいろ説き聞かされれば我々にもなる程となづかれる。併しうなづいただけで、ほんとに判るのではない。知ることとほんとに判ることは違ふのである。ほんとに判るためには少くとも佛敎の先覺者たちの經驗しただけの苦心を我々自身が體驗せねばならぬ。要するに科學教育の中心は、科學の成果を知らせることではなしに、凡べての豫想をのけさせてひたぶるに問題と取りくませ自らはゆる追體驗させるところに中心があるのである。近頃よくいはれる「科學する心」といふのも、この意味を述べたものに外ならない。

こゝで附言しておくべきことは、科學的製品の享受に關し、たゞ右のやうにのみいふならば、科學への親しみ、技術の普及に對し非常な障礙となるといふ意見に就いてである。現にドイツなどは、ナチス政權の成立と同時に自動車の普及に多



大の關心をもつて、所謂國民車なるものを製造してその購入を國民に勧めてゐる。これには勿論工業生産力の擴充による國防力の充實が意圖され、また機械化部隊の擴充に必須のこの自動車に國民自身の手保有させて一朝有事の際に備へる事もその狙ひの一であることはいふまでもないのであるが、更にこれによつて國民の科學的技術的水準の向上を計ることも期待されてゐるとみてよいであらう。丁度ベルサイユ條約で發動機出力三十五馬力以下の小型飛行機以外の一切の航空機の製作を禁止され、ドイツの飛行機工業が大戦後急激に凋落し、かくては遂にドイツ再興の機なかるべしと憂へられてをつたとき、既に早くグライダーの研究に着手し、その普及に非常な努力を拂つたのと同工異曲の趣がある。これらのことが互ひに相まつて今日のドイツの偉大な發達の基礎となつてゐる。このやうに科學的製品の普及は必ずしも科學的能力の向上に妨害とならぬのみでなくむしろこれを積極的に促進するものであるともいへる。事實我々は科學の成果に熟知しこ

れに親しむことなくして科學への理解を得ることは困難であり、また技術能力も向上しがたい。この點からいふと、いはゆる生活の科學化——科學の日常生活への攝取も大いに必要だと見るべきである。

併し我々がこゝに忘れてならぬことは、この科學的製品の享受が我々をこのやうに科學探求に成功させ得るためには、豫め我々に積極的な生活意欲と自然に對し謙虛に何らの豫想なしに接する態度とが豫め出來てゐなくてはならないといふことである。自動車の普及が心身を薄弱にし、安易なる生活のみを欲して積極的な生活意欲を萎微させるやうな方向に我々を誘ふならばそれは何等の科學的技術的向上に資するものではない。従つて科學的製品はこれを普及せしめなければならぬが、併しそれによつて我々の心身を薄弱にすることがあつてはならぬのである。これが與へ方には多大の注意を必要とする。私的消費のうちにもちこむことなく、公的施設の科學化といふ方向に進むことはこれにとつて一の指針とな



らう。かつて和魂漢才といふことがいはれたが、同様の意味で我々の自身の生活はこれをあく迄剛健に保ち、旺盛なる意力を常に養ふことに努めて體鍊にも怠ることなく、缺乏にも耐へることに慣れ、他方公的機關には可能な限りの科學的施設を施して一切の能率をたかめると共に、科學への親しみを増すことが、今日希望せられることの一であるというてよいであらう。要するに生活の科學化は、生活を容易にし、敢爲の風を消失させることとなるやうな、所謂科學的製品の攝取とは別問題であることを自覺しつゝ、生活の科學化を計ることが肝要である。

## 五

今日科學を振興するに必要な心構へは、たゞ右にのべたやうなことだけでは、それは必要條件ではあつても十分條件とはならない。研究者はもとより從來のいはゆる科學精神、合理主義をすてて、我々の對象への態度を即物的にし實證的に

することは必要である。併しこれだけでは、如何なるものが對象として取上げられるか、その點が決められない。對象が決められなければ振興される科學の何かも決まらない。そこで取上げる對象の何であるかを定める我々自身を先づはつきりさせておく必要がある。それが科學振興の第一歩である。それによつて科學がどんな方向に、どんな仕方振興されるかがはつきりして来る。要するに何のためどんな科學を發展することがよろしいかを明らかにしておく必要があるのである。

このために科學を振興さすべき我々は、一體どう生きべきかが問題となつて来る。我々はこゝで我々はたゞ國民としてしか存在してゐないといふことを想起すべきである。即ちこゝに我々の基本的な存在の様式がある。従つて我々の行爲の如何なるものも常にたゞかゝる國民としての我々の行爲である。それ故何が對象として構成されるかを眞に決定するものは、かゝる國民としての我々である。現



實には百年の課題として萬邦その堵に安んじて各、その業にいそしむを得る大東亞共榮圈の建設に邁進する我々が、この對象の何たるかを決定するのである。

ヨオロッパの科學はさきにもいふやうに、大規模の工場工業による世界制覇を背景にして成立してゐる。そのためにヨオロッパ科學は、この工業と大した關係のない生物學などといふ方面では、物理化學工學などに於けるやうな進歩を見せてゐないといはれる。農業その他、原始産業と關係をもつ生物學は、農業自體が主として彼等の植民地の責任に於いて經營されるために、たゞそこよりの收奪を目論む歐米諸國にとつては重大關心事とはなり得ないからである。また彼等の機械工學は、勞働者を單に勞働力としてしか見てゐず、國民としての能力發揮よりも、その社會體制の然らしむるところに依つて勞働力の最大限の利用を意圖する社會體制のもとに、勞働の最適度ならぬ最強度の強制を結果するに至つてゐる。これがヨオロッパ的社會の基礎を動搖させる一因となるべきことは疑ふの餘地がない。

なり。

ともあれ、今日我々が必要とする科學はこれとは正に對蹠的である。我々の科學は三百年に亙るヨオロッパの不當なる東亞支配體制を變更せしめ、東亞諸邦の能く安堵してその能力を發揮し得る共榮體制を建設するための科學である。この觀點から對象も方法も決定されねばならない。そこで何よりもかゝる科學の建設者が必要とせられる。それは單なる純理の愛好者ではあり得ぬ。例へば醫學にしても理論的興味ある病理學許りでなく國家的必要に基づいて國民衛生の研究を奨めるといふ風に科學に對する研究統制廣くは科學政策の樹立が必要とされる。従つて科學教育も單なる科學的性能の涵養に止まらず、よくこの點を理解する事が望まれるのである。又技術者養成の問題に關しても同様な配慮が必要である。

いふ迄もなく我が大東亞共榮圈は、東亞の天地からヨオロッパの植民地的支配を一掃することに依つて始めて建設される。従つて我が國の東亞經略にはこのやう



な植民地的支配の要素は毫末もあつてはならぬ。自分自身を清浄なるものにせずして他を淨化することは不可能である。まづ自ら王道樂土建設の中心となり主體となるに、足る道義性をもつべきである。これが新秩序建設の第一前提である。これは具體的にいへば、我々が東亞經營に於いて我々は單なる命令者でなく、心からなる指導者であり協働者でなければならぬ。征服的觀念からではなしに、むしろこれまでヨーロッパの植民地的支配のために悩んでゐた東亞の全民衆を解放するための指導者であり協働者でなければならぬ。

我々がもしも單なる命令者であつてよいならば、植民帝國イギリスがやつてゐるやうに、我が國も原住民を懷柔するに必要な社交性と、植民地經營のあらゆる困難と、慘酷な血をも嫌はぬ神經と體力との養成を計ればそれでよい。イギリスの指導者階級の教育機關であるイートンスクールなどでは、決して我が國に於いてのやうに人文的教科を重視しない。右にあげたやうな教科の訓練を中心として

ゐる。人文的教科に重點をおけば、自ら國民を體力的に柔弱にし、又それに伴つて意志も弱く實行力の乏しい理論家を作り上げる事になる。小市民的な知識人、徒らに良心的で敵を憎むことも出來ず、自分の意志を忘れた知識人が出來るのである。敵を憎むことの出來ぬものは、又味方をよく愛し得ぬものである。彼は良心的ではあつても結局のところ功利主義者である。いはば植民地的支配をうけるには都合のよい、國民的自主性を忘れた人間、小理窟ばかり言つてゐて團結して起上ることを忘れた卑屈漢である。そこでイギリスは人文的教科を、植民地の上層階級の子弟に與へて線の細い人文主義者に育て上げはするが、本國の、特に指導者的位置にある者の子弟に對してこれを尊重しないのである。こゝに我が國今後の教育政策樹立上注目すべきものを見出すのであるが、併し我々は東亞に對する支配者にならうとするのではない。先きにもいふやうに指導者たり協働者たらんとするのである。幾多の資源を有し乍ら資本生長の未熟、技術發展の不十分なる



に依つてこれを開發し得ぬ支那との協働者、又指導者たらんとするのである。イギリスがインドに對して行つてゐるやうにたゞこれを原料國として、本國産業確保のために利用するのみならば、我が國より少數の技術家を送り、彼等は單に勞働力を供給すれば事足りる。例へば地下資源の開發、棉花の栽培のためのみならば、少しも高度の技術は支那には必要ではない。彼には生れ乍らにある勞働力さへあればそれでいゝ。併し我々が支那と協働せよといふのは、支那をも工業國として育て上げようといふことを意味してゐる。支那をも近代文明の惠澤に浴さしめようといふことを意味してゐる。日滿支が互助連環の有無相通ずる近代工業國となつて始めて東亞は安定する。このために我々は支那に對して命令者としてではなく、協働者として立つを要するのである。而してこの協働のためには、我が國より支那に對し、資本のみならず大量の技術者を送らねばならぬ。また支那の指導に當る者自體、單なる行政家であるよりも先づ技術者でなければならぬ。この點は

早くより植民地經營にのり出してゐる歐米に一日の長がある。支那に入り込んでゐる歐米の宣教師は新教八千舊教三千位あるとされてゐるが、彼等はたゞキリスト教の宣傳をやるだけでなしに我が國古代の傑僧が何れもさうであつたやうに、農民に對しては各種の農事指導を行ひ、病人に對しては懇切な治療を施し、天災に際しては救恤に力をつくしてゐる。こゝに今日まで歐米があれ程の侵略を行ひ乍ら、尙勢力を保持伸長させてゐる所以があるのである。我々はこの點に大いに學ばねばならぬ。

かくして我が國今後の教育は、かゝる技術者の養成に全力を注がねばならぬ。もとよりこれが單なる技術習得者ではなしに、東亞の運命を背負ひ、これが指導の力をもつた技術者であるべきことはいふまでもない。單なるエンヂニアでは役に立たぬ。エンヂニアであると同時に國家指導者でなければならぬ。かゝる我が國の要求が教育の一切を決定するのであり、科學教育の必要も、産業的軍事



的要求の外に、實にこゝよりも生ずるのである。

従つてこの科學教育は、指導的人格の鍊成に必要な教育上の種々の考慮と關聯し、それと緊密な統一の上に行はねばならぬ。殊に列強の惡意ある監視妨害の下に、文化程度低く生活力旺盛なる支那民衆の間に這入り、彼等の心を捉へ、彼等を心服させ、その上でこれを技術的に協働、指導し得る國民の養成が必要である故に、この科學教育は單に科學教育であることは出來ぬ。廣義の政治教育を伴はねばならない。技術者自身が政治的指導能力をもつやうにせねばならない。ここに今日の科學教育運動の特異性もあり、重要性もあるべきである。

さてこのやうにして技術者や自然研究者が養成されるとき、そこに自ら從來の歐米に摸した研究態度とは異つたものが現はれて來る。東亞共榮圈建設者たるにふさはしい對象選擇も出來て來る。こゝに輝かしく科學の新たなる發展が約束されるのである。殊に我々の東亞新秩序建設は、我が國體精神の一の顯現であり、

國民の均しく己を空しくして隨順歸一しまつるところである。この隨順歸一の精神に基づいて國民の活動するとき、自ら科學研究に必須の實證精神即ち徒らに己を主張するところなく、謙虛に對象に接する態度は養成され、科學發展の絶好の基礎も形づくられるのである。この意味に於いて我が東亞新秩序の發足は輝かしく科學新秩序の發足でもあり得るのである。

### 第三節 幼兒教育論

—

我が國の教育は今日大きな轉換を迫られてゐる。これまで人々は子弟を學校へさへやつてあげば、それで立派な國民が養成されるものと安心してゐた。ところが結果は豫想を全く裏切つた。極端にいへば、教育すればする程國家的自覺の乏



しい國民が出来るといふことにさへなつた。高度の學校教育を受けたものの多い都市の生活が、地方と較べて如何に不健全であるか。國家が今日一の重大な事業として進展させようとしてゐる大政翼贊會の如きも、その宣傳はよく行はれてをる筈なのに、都會に於いては農村程眞劍には活動が進められてゐない。このやうなことは結局、從來の學校教育が、國家生活とは無關係な知識や藝術の切賣りをして來たことに依るのである。

而もかうした寒心すべき傾向は、支那事變四周年を迎へた今日でも尙見られな  
い譯ではない。春が來れば大學を卒業し専門學校を卒業して、國家の指導的地位  
に就いて活動すべき青年學生の爲すところに少しく注意すればよい。彼等のある  
者は如何にだらしない姿をしてゐることか。こと外形に屬するとはいへ、輕視  
さるべきではない。内に毅然として努むるところがあれば、外形自ら整ふは必定  
である。彼等に自覺が乏しいからである。この時局下に何をなすべきかの自覺が

乏しいからである。

併しこれも無理はない。從來學校の教育はたゞ講義をし書物を讀ませるだけの  
ことであつた。他日彼を國民として活動させるために教育したのではなかつた。  
たゞ學問をさせればそれでよいと考へたのである。

今かうした教育が反省されてゐる。小學校が國民學校と改められ、皇國民の鍊  
成をもつてその主眼とするに至つたのも要はこゝにある。學問も體鍊も悉く兒童  
をして他日皇國民としてよく活動せしめるためである。

## 二

かくて今日では、教育の要は獨り國民學校に止まらず、すべて皇國民の鍊成に  
あることが自覺されてゐる。この道がまた幼兒教育の道でもあるべきことはいふ  
までもない。



幼稚園教育は、幼児が母親の膝下で覚える電車や汽車、牛や馬に就いての知識を計画的に合理的に與へることではない。國民學校に入學してから上成績で過せるやうに、今のうちから音程を確に歌ひ、巧に計算が出来るやうに、器用な畫がかけるやうにすることに主眼があるのではない。何よりも先づ幼児をして日本人らしい幼児にすることである。皮肉な表現をするならば成長して後自分の子供をもつたとき、その子供の教育をかうした氣持からすることのないやうに、今のうちから幼児にはつきりと日本人であることの意識をもたせ、日本人としての誇りを感じ得るやうにすることが肝要である。日本人としての根柢を培ふことが肝要である。

從來の幼稚園で主として行はれた右のやうなやり方は、今日各方面からその反省が要望されてゐる主知教育の流れをくむもので、たゞ子供の精神年齢に應じた扱ひをするといふことに許り重きをおいてゐる。勿論精神及び肉體の發達によく

適應するといふことは大切である。併しより肝心なことは、適應した何を與へるかといふことである。

一部の心理學者の間には、兒童をその發達段階に應じて伸ばして行けばそれで立派な人間が出来上るといふやうなことを今でもいふ。そこから分けても幼児教育は常に遊戯としての意義をもたなければならぬ、といふやうなこともいはれるのである。そして様々の遊具や何か工夫され、又繪本などに就いてもいろいろな考案が施されて來たのである。

もしもかうしたやり方ですつと教育されて行くとしたならば、ものをよく知つた人間は出来るかも知れないが、國民はつくられない。どこの國民でもいゝやうな人間が出来るとのみである。

これは從來のキリスト教主義の幼稚園教育には普通のことであつた。そこでは唯一なる神の僕として子供を育てればよいのである。たゞ神から造られたまゝに



極く自然に子供の天性を尊重しつゝ、育ればよいのである。これがフレイベル以來  
幼児教育者の信念であり、我が國にもこの亞流の多いことはいふまでもない。

## 三

右のやうに言へば、今日現に幼児教育にあたつてをられる人々からは、嚴重な  
抗議があることと思ふ。

第一幼児に日本人であることの意識をもたせるといふやうなことは出来もしな  
いし、またもたせてはならぬといふのである。その據りどころとするのは、幼兒  
は本來感覺的であるから手に觸れ目に見るものには興味をもつが、國家意識とい  
ふやうな抽象的なことには容易に感じたり自覺をもつたりするものではない。大  
人でさへ外國に行き他國と比較して始めて日本人であることの意識をもつといふ  
のに、この比較もなし得ぬ幼兒に國家意識などもち得る筈がないといふのである。

もしもこれを強ひて與へようとすれば、他國を誹謗したり輕侮したりする排他的  
な觀方を注入して、幼兒の氣宇を非常に狭少なものとして了ふ。大東亞共榮圏の  
建設を今後擔當すべき少國民を教育するのにかうした態度ではよくない。如何な  
るものをも抱擁して餘さぬ廣大なる度量を幼少の時から涵養しておくべきだ、か  
うしたところにその論據があるやうである。

勿論少國民には早くより抱擁性に富んだ廣大な氣宇を養ふべきで、對立的排外  
的な觀念を與へてはならぬ。併しこのことは國家意識を與へるか與へぬかの問題  
とは別個である。むしろかうした必要があればこそこの意識を與へるの要がある  
のである。

國家意識のことに關し、かうした誤解紛糾が生ずるのは、日本人であることの  
意識、自覺をもたせるといふことを直ちに、ヨオロッパ流の國家意識をもたせる  
ことと解釋するからである。如何にもヨオロッパでは、ナチス・ドイツなどにして



も、その國家觀念は極めて對立的排外的である。ある一部の國家學者の如きは國家は防衛組織なりとさへいつてゐる。この立場に立てば、國家意識をもつことは明らかに他の國家に對し對立的排外的な意識をもつことと一つである。ナチスも世界の歴史は民族鬭争の歴史であると理解し、如何なる民族國家も他國の利害に拘泥せず、もつばら自國民の利益のために戦はなければならぬ。弱少民族をあれむ人道主義的な感傷によつては國家の隆昌は招來されない。國家は我が國家のために我が民族のために戦ふ勇敢なる兵士によつてのみ輝かしい未來が與へられるといつてゐる。即ちその云ふところに依れば、民族の生活はそれ自體が戦ひであり、従つて民族の一切の機構はこの立場から營まれなければならぬ。即ち民族は鬭争共同體として編成されなければならぬ。國家はこの民族の一機關たるべきものとなるのである。

このやうな見地に立つて國民が國家的意識をもてば、その氣宇は如何にも狭少

な排外的なものとなるの外ないであらう。併し我が國の國家觀は果してかうしたヨオロッパ流の偏狭なものであるだらうか。これは本書の他の箇所で既にしばしば述べて來たところで、いま更こゝに繰り返すの要はないのであるが、我が國の國家觀念はこれとは全く對蹠的なものである。各民族、各國家の大和協同こそが我が國の願ふところである。檀原奠都に際しては「上は則ち乾靈の國を授け給ふ徳に答へ、下は則ち皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ、然して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇とせむこと、亦可からずや」と仰せられ、日獨伊三國條約締結に際して賜つた詔書には、「大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一字タラシムルハ實ニ皇祖皇宗ノ大訓ニシテ朕ガ夙夜眷々惜カザル所ナリ……惟フニ萬邦ヲシテ各、其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシ」めんと宣はせられてゐるのである。この何處にも對立的國家觀念はこれを見出し得ない。そこにはただ御仁愛偏き大御心を拜するのみである。而も我が國臣民の道が古來私の一切を



擧げて上に奉公隨順しまつるにあることは申す迄もない。従つて我々が國家觀念をもち、日本人たる意識、日本人たるの誇を自覺するといふことは、何等排外的な意識をもつことではなく、この萬邦をしてその所を得せしめんとせられる大御心に隨順しまつることに外ならない。この無比なる國體のもとに生をうけたることの喜びを體認させることに外ならない。

この觀念を培ふことが假令幼少にして理解力は乏しいといつても出來ぬ筈がない。現に我が國の多くのキリスト教の幼稚園は神に對する感謝の念を養はうとして種々の努力を續けてゐる。この努力が、我が國體に對する感謝觀念の養成に對してはなし得ぬといふことはあり得ない。ありとすればそれはたゞ懈怠である。

この點についてはキリスト教徒であるフィヒテが「獨逸國民に告ぐ」る書の中で述べてゐる次の言葉を引用しておかう。

「祖國愛は、先づ第一に獨逸國家、獨逸人の支配せらるゝすべての地方に感激を

與へ、獨逸國家のすべての決心を定むるに際して最高の權威となり原動力とならなければならぬ。されば吾人が先づ期待の眼を向けるのは、この國家そのものを措いて外にないであらう。近代歐羅巴に於いては、教育は本來國家そのもの手より出でずして、一種の他の權力の手より出でゐる。かくの如き權力としては諸國が大抵自國特有のものをもつてゐる。即ち教會の天國的靈的國家である。法王國は自己をこの世界の團體の一要素と見做すよりは、むしろこれと全く無關係なる天國の植民地であつて、この地上即ち異國に於て、彼が根を張り得たすべての場所に於いて天國の市民を募集する任務を帯びたものと考へてをる。その教育はたゞ人間をしてあの世に於て咀はるゝことなく、常樂を受けしめんとすることをのみ目的としてをつた。宗教改革に依つてもかくもこの羅馬教の勢力は從來頻りに反目しつゝ、あつた現世的國家と調和した。併し乍らたゞ調和したのみであつて、彼等が從來の考を捨てたのではない。従つてその教育に關する昔の考は依



然として維持されてをつた。最近に至つても、否、今日に至るまで、恒産ある階級の教育は兩親の私的事業として兩親の適宜に行ひ得るものと考へられ、彼等の兒童は普通唯彼等の生活に役立つやうにとのみ教育された。そして唯一の公教育、國民の教育は天國に於ける常樂に達せしめんとする教育にすぎなかつた。

國家は從來の如く人民の常樂に關する配慮を自己の職權外として拒絶するのは至當であるといふこと、即ちこの常樂のためには何等特別に教育を要しないものであるといふことを曉り、又羅馬教の如き天國の植民學校は本來存在すべからざるもので、すべての有爲なる教育の妨害になるものであるから、斯くの如きものには教育を委せておくことは出来ないことを覺らなければならない。國家はこの地上の生命に對する教育の益、必要なること、この教育を根本的にすれば、天國に入らんがための教育の如きは期せずして達せらるべきものであることを覺らなければならないのである。」

フィヒテのこの言葉は我が國今日の一般思想界に對する實によき警鐘である。

多くの文化人たちは、祖國の何たるかを知らずしてこれを世界的文化の植民地と考へてゐる。この誤謬を是正して文化に正しい方向を與へることは今日の急務である。殊に國家明日の運命を擔ふ現代國民形成のことに従ふ教育に於いて然りである。

我々が特に日本人的意識を明確にせよといふのは幼稚園が天國の植民地として經營されることを惧れるからである。我が國の幼稚園はあく迄も我が國の幼稚園であり、そこに於いて幼少の時より能く報本反始の念を養ひ、上に隨順歸一しまつる心情の根本的な鍊成をなすものでなければならぬ。

この點でもはや改めて述べる必要のないところであるが、幼兒の天性、神よりの賜たる天賦の能力を伸ばすといふことにのみ重きをおいて來た從來のやり方の正しくないことは理解出来ることと思ふ。勿論天性を引きのばすことが不必要だ



といふのではない。逆である。大いに伸ばさなければならぬ。たゞ天性を發揮して何をするやうにするか、そこに問題がある。すぐれた天賦の知力を發揮して盗みを巧みにすることも出来るし危険思想の宣傳をやることも出来るのである。我は天賦を伸ばすとともにこれに正しい方向を與へること、右にのべたやうな日本人としての自覺を與へることにつとめなければならぬ。

#### 四

我が國の幼児教育はこのやうにして單なる天賦の尊重に終つてはならない。もとより幼児の發達に適當した扱ひは必要であらう。併しかうした適當な扱ひをして何をさせようとするのか、そこに問題があるのである。この點から我が國の幼稚園教育には大きな反省が必要である。

古代ギリシヤは國民の訓練のために、七歳になればこれを國立の教育場に移して教育した。今日のドイツは十歳になればこれをヒトラーユーゲントに入れて團體的訓練を施してゐる。併し我が國は若者連中といふやうな青年組織があつても少くとも十四五歳までは家庭にあつて、父母が訓育の衝にあたつた。それまでは格別の團體的訓練など必ずしもされなくとも、立派に國民としての教育が行はれたのである。

我が國では古來家庭が國民教育の根源をなしてゐる。父祖重代の國體觀念は、自らに幼き者をして、その行くべき道を自覺させた。こゝに我が國の特質がある。強ひて家庭より引きはなし、ことごとしい訓練を施さずとも、立派に國民としての訓練は行へたのである。

もとより今日は事情が變化した。殊に都市にあつては家庭は從來のやうな教育の場所ではなくなつて來た。昔は家庭が同時に職業の場所として、祖父母、父母がをり、子弟の教育に當ることが出來たが、今日では祖父母と同居する家庭は都



會に於いては稀であり、のみならず父は早朝より夜まで家を外にして働かなければならない。かくて母が子弟の教育に當らなければならなくなつた。そこにはもはや舊來の嚴父慈母の姿は見られない。嚴母慈父ならまだしも慈父慈母となつてしまつてゐる場合が多い。これは父にしてみれば無理もないことである。僅かしか子供と共に居ることの出來ぬ父は、叱るよりも頭を撫でたいのが人情である。このやうにして子供は甘やかされる許りとなつた。これで立派な子供の訓練の行はれる筈はない。

かくて幼児教育の振興のためには、何よりも先づ家庭生活を振興するの要がある。家庭にあつて父母が國民としての生活に努むるところがあれば、子は自らこれにならふものである。本が改らずして末の改むることはない。併し今日の社會情勢に於いては家庭生活の右の状態が直ちに改善せられようとは思はれぬ。父は家を外にして働き、子女の教育に専らなるを得ず、又祖父母と別離して家の美風を

育つるに難い状態が続くであらう。そこで幼児教育のために特別の施設が必要である。即ち幼稚園の如きものの存在意義がある。併し幼稚園は幼児教育の本流をなすものでないことを知らねばならぬ。源はあくまでも家庭にある。幼稚園はこれを補助するのみである。一部を代行するのみである。

このやうにいふと恐らく幼稚園當事者の方々は色をなして反對されることと思ふ。幼少の子供はどうしても家庭にあつては我儘、自己本位の氣もちになり易い。これを救ふには如何にしても家庭生活から團體生活に子供を移さなければならぬ。團體生活に入つて我儘を捨て他を赦し共同心を養ふやうにせねばならないと主張せられることと思ふ。これは如何にもさうである。我々は團體生活に入つてよく節制とか互譲とかいふやうな社會生活に必要な諸徳を養ふことが出来る。併し我が國民にはこの社會的訓練が缺けてゐた。今後の社會生活にはこれを訓練することが必要である。この點で私も幼稚園の存在意義を大いに認めるのである。



併し我が國民生活は、國民のいはゆる共同生活、國民共同體精神にもとづいた生活を本位とするのではない。歐米の如き國民を中心とし國民のための國家であるならば、國民の共同生活がよく營まれ、ばそれで結構であらう。國民の全體主義的團結が出来ればそれで十分であらう。従つて國民の訓練としては團體的訓練を與へることが最初の課題となつて來るであらう。けれども我が國の國民生活が決して自分等のための國民生活でないことは、我々の信じて疑はぬところ。我々は上に隨順歸一しまつり、各々がその分とするところをよく盡して奉公することをもつて國民生活の根幹であると信ずるのである。従つてかうした生活の訓練のためにはたゞ團體的訓練だけでは不十分である。その根本になるものがなければならぬ。即ち形式的にいへば「仕へまつる態度」の訓練がなければならぬ。而もこの仕奉の道の訓練はやがて上に仕へまつる道の訓練に通ずるものでなければならぬ。而してこの要求に應へるものは、たゞ代々父祖の名を負うて仕へまつ

つて來た家に於ける訓練のみである。子を見ること親に若くものないやうに、また子の心情を培ふものも親に若くものはない。子はこの親に仕へることによつてよく奉仕の道の何たるべきかを悟り、進んで國民としての大義について誤りなきを得るのである。この意味に於いて殊に幼少時に於ける國民的性格の鍊成にとり家庭生活の重要性があり、幼兒教育にとり家庭教育がむしろその本流をなすものとせられるのである。

こゝからしてまた幼稚園にとつては、この家庭教育に即應した保育をなすことが求められる。

すめろぎに仕へまつれと我を生みし

我が垂乳根は尊くありけり

と歌つた古人の精神はかくて幼兒教育者にも強く汲みとられなければならぬ。それによつてのみ幼兒は日本の幼兒として育てられるのである。又このやうに幼兒



教育をその本流に還すことに依つてのみ、眞の國民は養成され、東亞新秩序の運営者も育成されるのである。

#### 第四節 少國民文化論

—

文化は人によつて形成されたものであるが、同時に自ら人を形成するはたらしきをもつてゐる。例へば藝術に於いて、詩は人の創作したものであるが、その健全なるものはまた人を感奮興起させる力をもつてゐる。かの正氣の歌は幾人かの藤田東湖を作り上げることが出来た。技術にしても同様である。技術は初めは、それをつくつた人或は見出した人にしかよく判りもせず、また用ひることも出来ぬものであるが、その技術の普及するにつれて一般的な技術的能力——技術水準の

向上を期待することが出来る。人々は特定の技術に習熟することによつて、一般的技術力を昂めることも出来るのである。

この點から考へてみると、どんな文化を發揚し普及させるかといふことは、國家にとつて重大な意義をもつ。今日の文化が健全であるか否かは國家の明日を決定する重要な因子であるからである。殊に今日のやうに國家の大方向轉換が要望されてゐるやうな場合には、どんな文化政策が意圖されてゐるかは、その方向轉換の成否をも決するものである。もしも徒らに繊細なる文化を洗煉せられた高級なるものとしてこれを佳しとするに於いては、剛毅にして果斷なる性格なくしては成就し得ぬこの方向轉換に拭ふべくもあらぬ陰翳を與へることもなる。ここに一般の文化政策への關心が漸次たかまりつゝある所以がある。

文化政策に於いても、現在政治諸般の施策に見られる如き統制の強化が行はれつゝある。文化政策として重要な出版文化政策に關しては、内閣情報部の擴大強



化に伴ふ情報局の設置と共に次第に政策が具體化せられ、先きに日本出版文化協會の設立を見、またこの種の統制機關はその他の文化部面にも次々に何らかの形をもつて具體化しようとしてゐる。

併し文化政策のかうした一般的な傾向は、これ迄文化の尖端にあつてこれを指導して來たと自負する一部知識人の不満を買つてゐるやうである。それといふのは、それらの人々のいふところに依れば、文化は命令や強制に依つて生まれるものではなく、却つて有爲なる能力をもつた者の個性的創造によつて始めて作られる。農作物でも増産するやうな心算で文化統制を行つたのでは、健全なる文化の發展は見られぬといふのである。そこで文化統制は決して文化を生かし、より大ならしむるものではなく、むしろこれを萎縮させるものである。文化は個性の創意的なる活動によつて發展させらるべきものである。もしも文化統制が行はれるとするならば、その自由なる創意をいやが上にも發揚させることをこそ目ざす

べく、その活動を掣肘するが如きことは嚴にこれを慎まねばならぬといふのである。この聲は一部知識人の間に今日でも尙極めて旺盛なるものがある。

## 二

文化は勿論、創造に依りて成立し發展する。而もその創造はたしかに個人を仲立ちとして行はれる。單なる命令や強制に依つてではなしに個人の自發的活動に依つて創作される。その意味では確かに文化は自由の所産である。併し問題は、自由の何たるかにある。

直截にいへば、この自由は、かの自由主義的なる自由とは全然別個の事柄である。事實自由主義的ならぬ社會にも、文化の發展はあり得たのである。例へば、近代ヨロッパ人が專制的なりとして誹謗する東洋的社會にも隆々たる文化の繁榮がある。我が國のことはこれを除くとしても、支那に於ける漢代、唐代或は宋代



の文化には實に燦然たるものがあつた。またかのアラビヤ文明の如きがさうである。アラビヤ文明はヨオロッパ近代文明の先驅であり、これあるによつてのみヨオロッパは今日の文明を築き上げ得たのであるが、併しアラビヤ文明は何ら自由主義的自由の上に成立したものでなかつた。彼等の信ずるところに依ればその唯一なる神アラーの意志に身を委ね、アラーに對して從屬し服従することが人生最高の價值を有するものであり、またこのイスラムの神は萬物を支配する絶對神であり、この意志に依らずしては何事も起り得ないとされた。のみならずこの信仰に生くる彼等にはその教主であり君主であるカリフに隨順することが眞の生活であると考へられた。即ち彼等は自分たちの個人的なる自由はもつてゐなかつた。たゞ獻身的に神と君主とに奉仕したのである。さればといつて彼等はこの生活を決して不自由とは感じなかつた。彼等は彼等のこの信仰に生きつゝ、全く自由に振舞つた。信仰生活と自由とは完全に一致してゐたのである。本來自由とは社

會的な概念であるが、それは我々が社會の規範から解放された状態ではなしに、我が積極的に社會の規範の中に入り込み、規範のまゝに働いて何らの拘束をも感ぜぬ状態である。従つて自由なる特別の状態が社會機構の上にあるのではなく、我々が入り込んでゐる一定の社會機構を我々自身がどう受けとるかといふ我々の心意の問題である。それ故我々の生活と規範との一致のあるところに自由があり、その分裂するところに不自由が感ぜられるといへる。即ち自由は人の自覺に於いてあるのである。

アラビヤ人が輝かしい文化的業績をなしたとき、彼等の所有した自由とはかうしたものであつた。彼等の住む世界は如何にもヨオロッパ的な自由主義社會ではなかつた。併し彼等には聖なる自由があつた。身も魂も捧げて尙惜しからぬ自由があつた。この自由がアラビヤ人に文化を與へたのである。

我が國の文化史に就いてもさうである。徳川時代までの我が國史の何處にヨオ



ロツパ的自由の存したことがあるだらうか。國民は大君に隨順歸一しまつる以外に生くる術を知らなかつた。けれども彼等はたゞこの生活の中にのみ何の阻むものもなく、のびのびと彼の有する一切の力を發揚し得る眞に自由なる生活を見出したのである。私なき奉仕の生活の中に、ヨオロツパ的自由なきこの生活の中に生くる甲斐ある自由なるいのちを見出したのである。これこそが彼等の唯一の自由であつた。この自由が我々の文化を生んだのである。

眞の自由は、我が欲するところと自らの屬する社會の規範との間に何の相剋なく、互に相覆ふ姿のうちであり、必ずしも社會的規範の個人的個人より出づるを要しない。人は個人に本源的なる自由を認め、如何なる規範もその契約に出づるものと見做し、個人の究極的なる獨立を許しても尙不自由なることのあり得るはことわるまでもない。要するに自由主義的自由は眞實には自由ではない。もともと自由の概念は、自由主義的であることとは別個のものである。

かくて文化の創造に連る自由は必ずしも自由主義的なる自由ではない。のみならず我々は次のことを知らなければならぬ。即ちその個性の尊重さるべき文化創造者たる個人は、その文化の背負ふ傳統を通じてのみ存在してゐるといふことである。文化は常に民族的な國家的な財産であつて、個人のものではない。個人の文化創造に於ける創意は彼が傳統を自分の工夫に依つて如何に生かすことが出来るかといふ點からのみ考慮に値する。従つて現代の如き傳統の混亂せる時代に於ては尊むべきは傳統をよく匡すことである。個性はそれによつて自己の生くべきところを見出し得るであらう。かくて現代に於ける文化政策の課題は、個人を如何に文化創造に参加させるかといふ前に、文化の傳統を確立しその向ふべき方向を判然とさせるにある。従つて現實的には我が文化は日本の文化であることを明確にし、これが發達のために個人ではなしに全日本人に向ふべき道を示して活動せしむるにある。現代の文化政策が統制部面を強化しつゝある所以である。



文化政策に於いて今日尙一部知識人の唱道するいはゆる自由なる創造の、今日顧みるに足らぬことはこれで明らかであると思ふが、今後の文化は何をもつてその基幹とすべきであらうか。

文化創造に際し右のやうな個性尊重を説くやうになつたのは、もとより文化をたゞ人の創つたものと簡単に考へ、而もその人を凡べての根源とし規範は其の中にあるとするから、創造に必要な自發性が直ちに自由主義的自由とされるためである。併し我々にとつて人といふのはいつでも國家に於ける人である。國民としての人である。國家が我々を人として生かすのである。

ところで國家は現實的には常にそれに對立する他の國家の存在を豫想する。國家間に對立があれば互に防衛は必須の業となる。それ故誤つた見解ではあるとし

ても、一部の學者が國家を目して防衛組織なりとするのも故なしとしない。従つて國家は自らの存立發展のために物を生産し、藝術や學問の如き文化の創造を行ひ、生産や文化創造の技術の傳達を試み、更にこれらの諸作用が適當に行はれるやうに大所高所からの指導をなす政治の働きをもつてゐるが、たゞこれだけでは不十分である。そこにどうしても防衛の働きが加はらねばならない。經濟にしても殊に今日のいはゆる廣域經濟時代に入つては、外國經濟との交渉、摩擦が多く、常に外國の經濟力との抗爭を準備し且つこれを遂行せねばならない。即ち經濟の活動も必然的に防衛を伴ふのである。この點は文化に就いても同様で、いづれの文化も他の國の文化と競争の地位に立つてゐる。たとへそれが意圖的なものでないにしても、拙劣下等な文化は優秀なるもの下風に立たされて、いつかは衰頹の浮目を見ねばならない。そこで勢ひ各國はその文化に於いても單にその強化を計るだけではなしに、他國のものの壓倒を目指すやうになつて行く。ソ聯の共產主



義宣傳、英米佛を主としたデモクラシーの鼓吹の如き皆さうである。いはば文化戦争である。同様にさきの防衛を伴ふ經濟關係は經濟戦争といはれる。現に東亞の地にも英米蘭の我が國に對する資金凍結が行はれ、戦争に到らぬ一步手前のごとくで我が國の東亞共榮圈建設の企圖を挫折しようとしてゐるなどは明らかにそれである。ともあれこのやうに文化も生産も共に防衛的な性質を帯びてゐる。この防衛が文化や生産の面だけでは埒が明かぬといふことになる。それは武力戦争である。併しその本質とするところは、さきの文化や生産の分野に於ける抗争對立と何ら異なるところがなく、たゞ國家の發展を庶希するものである。

さうであるとすれば、軍事的防衛——武力戦争の行はれてゐるかゝないかによつて區別されて來た常時とか非常時とかいふ區別は意味のないことになる。たとへば武力戦争はなくとも、國家の防衛活動は、或は文化活動として、或は經濟活動として行はれてゐるのである。これは今日何人にとつても自明なことであるが、長

年泰平の時代にならされると、一見平和な文化活動の背後に隠されてゐる防衛的意義に注意されず、特別に文化活動にだけ從事出来る時代があるなど思ひ込まれ、この重要な事柄が看過される。そこで一部の文化人は、文化を至上なるものと思ひ做し、國家はこの發展に對して奉仕すべきであるとか、文化人は國家當面の要求に即應するよりも、百年の後に知己を見出すべきであるなど考へる。かうした見解の誤なる事は我々が別の箇所で見たり通りである。我々は現代のこの時局が國家のこの眞の姿を我々に明らかにし文化の本質を示してくれたことを感謝すべきである。かくて國家に戦争が行はれてゐるかゝないかで、常時とか非常時とかに分け、常時には文化や生産の發展に中心を置いて國家の發展とは無關係に文化至上主義、藝術至上主義を唱へたり、單に利潤を擧げようとして國民の消費生活を盛にすることのみを目指すやうなやり方は全く見當違ひである。徒らなる文化尊重が文弱となり、單なる消費生活がまたひ弱な、ものの役に立たぬ人間をつくり



上げることは恐るべきである。文化は常に國家發展のための文化でなければならぬ。また防衛的な文化でなければならぬ。生産も利潤第一主義ではなしに國家第一主義的防衛的生產でなければならぬ。利潤の如きも國家の向上發展と無關係に考へられてはならぬ。欲望の充足を目ざして行はれる生産は生物的人類の生産ではあり得ても國民の生産ではない。その意味で欲望から始まる經濟學は獸類の經濟學である。たかだか互に狼であるやうな人間の經濟學である。

併しまた防衛は、これを強調することに依つて文化や生産を衰頹させるやうなことがあつてはならぬ。文化や生産は本來はたゞ國家發展のためのものなる故、純粹に國家發展とつながつてゐる。防衛がその眞の形で行はれるならば、防衛の強化はやがて文化、生産の増強ともなるべき筈である。また文化や生産の増強は自ら防衛の強化ともなるべきであり、單なる文化主義や經濟主義に墮することがあるならば、そのやうな文化活動、生産活動は本質的に缺陷を藏してゐると見る

べきである。本來文化や生産はそれが國家的なる限り防衛的意義を有する筈のものである。そこで國家の體制としては文化、生産、教育、政治、防衛の一體となることが望ましい。それはいはば文武一如の國家體制である。今日國防國家といはれるものは、國家のこの體制をさすのである。

#### 四

文化政策の一般的な基調をなすものの概略をのべたが、文化をその根柢に於いて方向づけてゐる國家は、現實には課題をもつた國家である。而も一定の課題をもつた國家である。

我が國の今日課題とするものはいふ迄もなく東亞新秩序の建設にある。畏くも日獨伊三國條約締結の際に下された詔書に拜する「萬邦ヲシテ各、ソノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシムル」が如き新秩序の建設にある。近世の歴



史始つて以來、次第にヨーロッパ侵略主義諸國の來り寇すところとなつた東亞をその手より解放して、東亞諸邦をして自在なる發展をとげしめようとするにある。その第一歩は既に輝かしき成果を擧げつゝある滿洲帝國に見られる。滿洲帝國は我が國の指導の下に軍閥とロシアの帝國主義的侵略によりて與へられた多年の呻吟状態から今日始めて解放され、こゝに真正なる國家として誕生し、王道樂土としての實を結ばんとしてゐる。

我が國が現在遂行しようとしてゐるのはこの真正なる國家の形成にある。眞乎たる國家の國生みにある。汪精衛氏を主班とする新中華民國政府の出現もその意圖するところのこゝにあるはまたいふまでもない。併しこゝに注意すべきはこの新秩序は單に日滿支の互助連環をもつては確立せられないことだ。新秩序が、これの成立を不利とする英米蘭などの東亞に於ける不當なる植民地領有國の攻勢を反撃して安固なるものとするには、何よりも先づ東亞全體の經濟ブロックを形

成してその物質的地盤を固めなければならぬ。けれどもこのことは決して我が國が東亞の諸邦を單に利用しようとするものではなく、彼等をしてその所を得しめる唯一の途である。從來東亞の資源は遠く歐米に持ち去られ、少しも東亞のためには活用されなかつた。例へば南方から出るゴムは世界全産額の殆ど全部を占めるにもかゝらず、南方諸民族の生活を向上せしめるものとはならず、この資源なくば白人の來り犯すこともなく平和な生活を送り得たらうものを、却つてこれあるがために彼等は酷使されるの憂目を見てゐるのである。我々はこの民族を解放し、彼等が生産したものは、彼等の生活を幸福にするやうに計つてやらなければならぬ。我々が東亞に建設せんとするものはかゝる體制である。即ち東亞新秩序は東亞全邦の共榮體制と呼ぶべきである。けれどもこの體制は我が國一部の知識人がいふやうに決して東亞諸民族の民族主義的結合を意味するものではない。もとより東亞は英米流の帝國主義的支配から解放され、その間に如何なる



搾取も抑壓もあるべきではない。各民族はその逞ましい意力と知性とをもつて自主的に活動し得なければならぬ。だがさうかといつて我々は今すぐ各民族の自決に委ねることは出来ない。我が國を除いて各民族は今如何なる状態にあるか。滿支に於いて漸くその解放は緒についたが諸他の民族は今尙帝國主義諸國の強い壓力の下にある。この状態のまま、彼等に自決を許すならば、一見それによつて彼等に自由が與へられたやうであるが、結果は却つて實力を有する帝國主義の下にいよいよ動きがとれなくなるのみである。我々は彼等に自決の美名を與へるよりも先づ東亞に於ける唯一の強力なる道義國家日本を中心に結集させ、その力に依つて東亞に對する歐米人の觸手を一掃しなければならぬ。即ち我が國が東亞共榮圈建設の中心となり主體となる必要がある。

こゝに於いて我が國は何よりも先づ實力をもつて新秩序の建設に向ふべきである。殊に今日の世界情勢は千波萬瀾のあるべきことを豫想させる。而もそれは短

日月にして平靜に歸すべしとは思はれぬ。三百年に亙る帝國主義的支配は或は藉すに數十百年の長年月をもつてせねば完全なる拂拭を見ることはないであらう。我々は先づ我々の實力を養はねばならぬ。併し實力とは單に經濟力や武力をのみいふのではない。これを裏づけるに徳をもつてせねばならぬ。徳と力と兼ね備つて始めて建設の業は成り、新秩序は實現されるのである。

## 五

上述するところから我々は次のことをいふことが出来る。即ち今後我々の建設すべき文化は、右のやうな東亞新秩序建設の課題をもつ國家の要求に即應した東亞再建設者の文化であり、この東亞再建の課題をよく自分の使命として感じ、ただその中のみ生き甲斐を感じる國民の文化でなければならぬ。個々の國民の意欲に即應するよりもこの國家的使命に即應した文化こそが眞の文化であり、こ



の文化のみが、單に人間ではなくして現實にこの使命をもつ國民である我々の個性をよく生かし得た文化である。そこに個性の自由が尊重せられるか否かは我々の問ふところではない。従つて我々國民の文化は何よりも具體的には次のやうな性格をもつものでなければならぬ。

第一にこの大御代にこの偉大なる事業の遂行に關與することに最大の誇りと最大の責務とを感ずる我々の意識が明確に反映されてゐなければならぬ。御民我れ生けるしるしありとは、この全東亞の國生み——新滿洲を生み、新支那を生み、また新南方諸州を生んで、こゝに渾然たる大東亞共榮體制を生まんとする國生みの行はれつゝあるこの大御代にあへる我々の感懷であるべきである。

従つてこの國生みへの奉公は我々の全生活を意味するものでなければならぬ。我々の個人に終始するやうな問題は、我々の意識としては、問題として取上げるべきではない。何ごとも奉公の精神をもつて處理さるべきである。一身上に起る

不如意は、我々が奉公の誠に至らざるところあるが故に感ぜられるとのみ觀念さるべきである。もしもこの觀念が國民全般に浸透するならば、一億一心、大同歸一の、國民が眞に和合一體となつた國家體制が發揮され、國家の總力はよくその眞價を發揚することが出来る。こゝに新文化の第二の基本的性格がある。

第三に考ふべきは、新文化が文武一如の性格をもつべきことである。これは先きにも述べたことであるが、文化は本來防衛的尙武的性格をもつべきである許りでなく、更にこの新東亞建設を外國よりの幾多の妨害を反撃しつゝ遂行するには、文化自體かゝる鬭争性をもたなければならぬ。即ち我々が文化的により多く洗煉されることによつて却つて益、この建設の能力と意志とを強化されるやうな文化でなければならぬ。從來文化としていへば何らかもの柔らかな繊細なるものを意味してゐる。また生活程度の物質的向上が文化的なることの指標だとされてゐる。例へば電氣なりスチームなりで煖房をしたり、冷房装置をしたりすることが



住家を文化的にすることだと考へられたり、やはらかな音楽や美術に親しむ事が文化生活だとされたりしてゐる。併しそれは決して我々の文化の神髓ではない。我々のもつべき文化は、我々の新東亞建設そのものであり、更にこの建設の意欲を根強くかき立てるものでなければならぬ。いはば鑑賞的な文化ではなしに創造的な文化でなければならぬ。例へば建設に必須なる心身に、野性的でさへもある強さを與へる鍛錬、またこれを賞美する藝術が我々の文化である。従つてこの藝術の鑑賞よりも鍛錬に文化生活の重點を置くのである。科學にしてもそれを我々の消費生活の中に持込むことに重點をおかず東亞建設の武器として捉へ發展させることが我々の科學文化である。

とまれ剛毅にして何ものにも屈せず、一度決意せることはこれを貫徹せずんば止まず、時には野性的でさへもある意志力と體力とをもつてこの大御代に民として生く可き道に徹せる者こそ眞の文化人の名に値する。感受性が鋭敏で批判的思

索に長じ藝術を愛するを知つた知識人もそれだけでは文化人たるの價值なき者と貶せられるであらう。

我々の新文化は第四に東亞諸邦の範としてこれを善導する能力をもたねばならぬ。それには獨り力み返つた豪傑風の文化ではなしに、科學的であることも必要である。殊に我が國を除いた東亞に缺くものは何よりもこの科學的な能力であり、東亞の今日迄の悲運は自らの科學をもたなかつたに依るともいへることを思へば、これは明らかである。併しこの科學はいはゆる科學的利器を器用に使ひこなせるやうにするための科學であつてはならない。自然物たると社會たるとを問はず、現實によく即應しつゝこれを處理して我々の意圖を實現するに足る科學であるべきである。本來科學は我々の意圖を現實に即應しつゝよりよく實現しようとする一の技術である。普遍的なる理法の發見とその適用を意圖するといふヨオロッパ的觀念は本末を誤つたものである。もともと自然科學たると社會科學た



るとを問はず、廣く科學の對象とする現實は、我々のもつ我々の構成する現實であり、我々がその解決を迫られてゐる課題そのものである。決して抽象的一般的な生物學的範疇としての人間の構成するものではない。それは現實ではなくして假構である。

かくして新文化によつて昂揚さるべき科學は東亞建設者たる我々の科學である。翻譯科學を流行させることではない。

## 六

新たに建設さるべき文化が右のやうな性格をもつものとすれば、これに對して兒童はいかやうに教育さるべきであらうか。

一般に教育のことを考へるときには、大人は現在に生きるが、兒童は明日に生きるものだから、兒童の教育は大人が現に所有する文化に依つて規定さるべきで

はなく、従つて兒童は大人が好ましいと考へる一定の型にはめこむやうな事はすべきでなく、むしろ如何なる型の中に入れても自由に活動し得る創造能力を涵養すべきだといはれる。これは本稿の第二齣に述べた文化創造に於ける個性の自由尊重論と相呼應するものであるが、その誤は既に指摘したところである。のみならず我々が今日建設しようとしてゐる右の國民文化は決して文化の一時的な特殊形態ではなく、むしろ文化の本質的な形態である。別の箇處でも述べておいたやうに我々が常に國民としてしか存在してゐないならば、國民の大同歸一しまつるべき中心點を明確にされ、その使命とするところを達成するため一切を擧げて奉公するといふことは理の當然であり、如何なる時と場合とを問はず我々の生活の根幹をなすものである。それ故兒童は何よりも右に述べたやうな新國民文化に向けて導かれなければならない。従つて尙武的鍛鍊の如きは兒童教育の基本をなすものであり、それが兒童をして日本國民として明日を正しく生かしむる所以で



ある。

かう考へると児童は今日送つてゐるその文化生活に於いて大きな方向轉換をしなければならぬ。即ち児童は今日文化の名に依つて與へられてゐる多くのものを悉く拂拭せねばならぬのである。例へば、それは都會に多いのだが、それが文化的だと考へられてゐるところの衛生生活にしても、一寸蚊に刺されたといふやうなときに、かゆさを我慢するよりもかゆみ止めの薬をすぐ塗つて貰ふやうに獎勵されてゐる。或は流行のハイキングに出かけて多少の疲勞を覺えたときには早速サロメチールか何かを塗つてその回復を計るといふ風になつてゐる。食事などにしてもさうである。嗜好にあつた濃厚な美味のものが數多く與へられ、砂糖黍を生で噛むやうなことは最早行はれない。要するにあらゆる方面が安易なやうに快適なやうに計らはれてゐるのである。これは娛樂や遊戯の面にも現はれてゐる。今の児童は木や土で自分から作つて遊ぶよりも小綺麗に出来上つた玩具で遊

んでゐる。殊に近頃科學教育が流行するに及んでは早速電氣應用の高價な玩具があてがはれる。また児童向き出版物の淨化が叫ばれ、ば、憎くむことも争ふことも人間としてよくないことだといつてこれを忘れたやうな、恐ろしく良心的な物語や色美しい上品な繪本が推薦圖書として與へられる。

児童が現に與へられてゐるかうした文化は児童をどんな風に育て上げるだらうか。おそろく我慢することを忘れて徒らに感受性の鋭敏な、不屈な行動力を何處かへおいて來た秀才タイプの児童が出来上ることであらう。併し國家が明日に期待してゐる青年は、如何なる困難、如何なる缺乏にも堪へ、出来上つた機械をただ利用するのではなくて、何が無くともあるものを工夫して必要を充たして行く科學性を持ち、野性的でさへもある強さをもつて目的を實現して行く力をもつた者である。従つて児童が現にもつてゐる右のやうな品々はすべてこれを児童の手から奪ふべきである。いはば舊來の文化的なるものを一切児童より奪ふべきであ



る。こゝに眞の児童文化建設の第一歩がある。

児童の眞の文化は、田圃に出て蛭が喰ひつき蠅子がさしても、尙平氣で手傳ひが出来、如何なる嚴寒酷暑にもめげず戶外に活動する意力と體力を有し、また不義に生くる者は凡て敵として抗爭しこれを正しきに導かねば止まぬ道義心を有し、更にこの生活を合理的に處理する能力に對する憧憬を喚起し、児童をして悉くこれを得ようとさせるものでなければならぬ。單に洗煉されたるもの、單に科學的なるもの、單に道義的なるものはすべて児童に與へるに相應しくない。児童に與ふべきは、児童をして、明日新國民文化の建設に立ち向ふ決意と能力とをもたしめるものでなければならぬ。

また児童の有すべき眞の文化は、商品としてでなければ手に入らぬといふものであつてはならぬ。然らずして、もしも主として商品の中にこれを見出し、これを普及させようとするならば、それは二重の意味に於いて誤を犯すこととなる。

一はそれが商品であるために必然的に購買力の多い都市中心的な従つて消費的なものにならざるを得ない。即ち小市民的な綺麗さが不知不識の中に眼目となり、今日の文化の通弊とする消費的鑑賞的な性格をまた帶びるやうになるのである。第二にその商品が児童に與へらるべきものとして各方面から推奨されるならば、子故に生きてゐる親たちは、如何なる無理をしてもこれを子に與へたいのが人情である。勢ひ教育費が嵩んで来る。収入の増加は一定してゐるのに、教育費の方が獨り嵩むならば、三人育てる費用では二人しか育たぬといふことにもならぬ。のみならず商品がかうしたことになるて來ればその影響は一般に消費生活をのみ娛しませ、次第に生活費の増大を來すであらう。生活費の増大は家族の減少をもつてせねば補ひがつかぬ。即ち殘された道は産兒の制限である。

少く生んでよく育てるといふことがよくいはれるが、これは今まで少く生んで來たものをして益、少く生ませるだけでなく、全體として恐るべき出生兒數の減少



を來す。然るに死亡率の低下には限度があるために、やがて人口増加に大きな障害となつて現はれる。この人口減少が如何に恐るべきかは今日のフランスがよくこれを示してゐる。

かく考へれば、兒童の文化生活を商品の消費の中のみ見出すやうな方式は嚴にこれを戒めねばならぬ。粘土や木の葉をもつてするやうな遊戯を如何に指導するか、部落の團體生活を如何に指導するかといふことの中に根幹を發見すべきである。玩具や讀み物には副次的なる意味をしか與へてはならぬ。逆説的にいふならば玩具がなくとも、讀みものがなくとも、眞の文化生活は可能だといふことを判らせるやうな玩具、讀み物を與へることが大切である。とまれ兒童の文化生活はこゝに大方向轉換をせねばならぬのである。

### 第五節 女子教育論

女子教育に就いて今日まで勿論幾多の所見が公にされてゐる。けれどもこれを男子の教育と比較して考へると、十分な研究が行はれてゐるとは云ひ難い。大體女子の教育を特に女子教育論として考へなければならぬ、といふこと自體がかしいことである。恐らく何人も男子教育論といつたならば、その語呂の悪さにあされるであらう。恐らく教育論としては男子教育論が本筋であるから、敢て男子教育論とはいはず、これを教育一般論として考へ、女子教育論の方はこれの一例の特殊理論であるといふやうな事が、無意識の中にも豫想されてゐるのではなからうか。ともあれこれまでの女子教育論には、女子教育を特殊教育として考へる傾向が多いやうである。その結果女子に對しては、特殊なる女子としての任務を單に強調するに終つて了つてゐる場合が多い。その特殊の任務が眞に何であるか、我々の國家生活全體にとつてそれはどんな役割をもつてゐなければならぬか、といふやうな點に就いては十分な考慮が拂はれてゐないやうである。こゝに從來



の女子教育論が、しばしば貧弱に思はれるいはれがあるのであらう。本稿では妻とし母としての特種なる女子の任務の存在することは前提として豫想し、この特種性は何に對する特種性であるかに重點をおきつゝ、考察することとしよう。

—

ゲーテもいつてゐることであるが、我々には二つの靈の相尅がある。それは、我々が生きるからには、よく生きようとする我々の生命の本能的な意欲に刺衝され、現在を超えて未知のより善き世界を求めて翔り行かんとするとき、必ず現はれて来る。それといふのは、よりよい世界は現在を否定することによつてのみ成立つのに對し、ともすれば安きにつかうとする曇つた我々の心は現在に安住しようとするからである。未知のよりよき世界を求めて翔り行くこの心は、猛き探求的な態度の中にのみ見出される。もしも我々に與へられてゐる世界に止つて、そ

れを愛惜し、そこに安易な生活をつくらうとするならば、我々の心にはこの對立がなく平靜であらう。併しそれは死せる平靜である。そこには進歩もなければ向上もない。我々にはこの對立がある時にのみ向上がある。

一般には我々は理性の命ずるところに従つて行爲すべきであると考へられてゐる。すぐれた建築には、すぐれた設計圖がなければならぬ如く、我々は合理的な計畫に導かれてゐなければならぬと考へられる。けれども建築がすぐれてゐなければならぬ、我々の生活が立派でなければならぬと、我々に要求するものはよりよく生きんとする我々の生命である。理性はたゞこれまでの經驗からして何がすぐれてゐるかを指示するのみである。より勝れたものであらうとするものではない。生命のみがより勝れたものを求めようとする。理性はたゞ生命に奉仕するにすぎない。

よりよきものを求める生命が實現されるためには、元來人が社會的なものであ



るから、たゞ自分にだけ通ずる獨善的なものであることは出来ぬ。公共性一般性をもつて來なければならぬ。即ちそこに自ら理性化が行はれなければならぬ。理性化は本來公共性の獲得に外ならないからである。理性化が行はれることによつて、生命はその活動を自ら意識し、又合目的たらしめることが出来る。それ故生命にとつて理性化されることは、その限りその本質をよりよく實現させるものである。併し一旦理性化が行はれ、ば、生命のはたらしは理性に従屬することになる。従つて停滯することになる。元來理性は規範的であることをその本質とするものだからである。停滯があつてこそ生命の理性による検討も可能になる。これなくば生命は何ものによつても把握し難き、無軌道的な活動に身を委ねるやうになることもある。又この検討によつて生命はさきの公共性をも、より完からしめ得ることが出来るのである。

このやうに生命は理性化せしめられることによつて正しく作用することが出来

る。所謂文化なるものもかくして實現せられた生命の所産である。いはば生命の表象化である。而して一度び成立した理性は、その規範性を絶えず發揮しようとする。それはまことに「章魚の足めいた搦みつく道具」で生命を自分の方へ引きよせようとするとも考へられよう。併しこれにより表象化、定型化が一定され、平靜ではあらうが、それは先きにもいふ如く、死せる平靜である。然るに生命はもともと停滯を知らぬ活動である。それ故一度は定型を得たとしても、やがては自らそれを打破して行く。形成しては崩して行く。即ち現在の生活に安住した、いはば下界の靈に對して、新たな色彩多き、穰り多き、高次の世界を仰望する靈が戦を挑むのである。而してまたそこには新たな定型化が行はれて行く。これは生命發展の論理である。形成と打破とは生命のさけ難き運命である。併しこれあるがためにこそ文化は停止することなく進歩する。勿論一度び得られた定型を打破してそこに新たな秩序を建設しようとするもの故、そこには様々の過失もあら



う。かの理性はこれをさけるためにいと小さき貢献をするであらう。完全にこれを防止することは出来ぬ。けれども我々がひたぶるに探求的である時、我々が専ら高次の靈に動かされる時、何時かはその満たされる時がなければならぬ。ひたぶるなる我々の探求は、永遠なる救への歩みである。それはきはだつて實踐的なる者にとつて不可缺の要請である。ゲーテがファウストを畫き、その死後メフィストフェレスの手を脱して天上に運ばれて行くとしたのも、これを示すものであらう。ともあれ生命のこのやうな止むことなき活動——こゝにかの教養追求の原動力があるのである。

我々が一度び與へられた生命活動の定型化に満足することなく、それを超えて行くことが出来るためには、我々は單に自己に與へられた定型内に固定してはならぬ。何よりも先づその定型の何たるかを自覺せねばならぬ。そのためには歴史的に民族的に社會的に異つて成立してある他の定型をも熟知せねばならぬ。生命

の定型化に對して現に規範の意味をもち、或はかつてもつたことのある定型を得た生命——文化財即ち古典に就いて熟知せねばならぬ。これが眞の教養といふものである。従つてそれは一般に誤解され勝ちである單なる好事的な物識をいふのではない。又單に閑暇を興味多く過すために求められるものでもない。これまでの女子にしこまれた藝でもない。(残念ながら今日の高等女學校の教科はこの藝の別の形にすぎない。「あれはいろいろな藝を知つてゐる」といふ意味の藝にすぎない)我々の教養は何よりも、これに反して旺盛なる生活力の故に、單に自分が専門に従事してゐる、或は従事すべき事柄に即してのものではなくて、廣く文化全般に向つて擴大して行くべきものであり、それが直ちに我々の生活を更新し得るやうなものをさしていつてゐるのである。併しそれは既に生命の定型化せられたるもの、理性化せられたるものへの理解である。従つて教養はその限り本來理性的である。そのために理性的である點だけが強調され、ば教養は好事的なものに



なり終る。併しこの理性的な教養を求める我々の心は理性的なのではない。その以前にあるところの、より高きものを求めてやまぬ我々の生命そのものである。即ちこの教養は理性の根據たる生命の力によつて常に刺衝されてゐなければならぬ。

このやうな教養を得ることによつて我々は始めて定型化されたる生命即ち文化への、又現に自分の營んでゐる仕事への反省も可能となり、よりよきものを追求する生命の力を刺戟することが出来、より高き秩序に至ることが出来るのである。即ちかゝる教養は、我々にとつて向上しようとする生命の力が本質的なる限り、又本質的であるといはねばならぬ。教養は生命に支持されてのみよく我々の養ひであり、又、生命は教養によつて始めて内容を豊かにせられ、かくてのみ能く具體的であり得る。

教養を右のやうに解することが出来るとすれば、この教養は、我々が進歩を願ふ限り何人にも持たせねばならぬ。この教養を形成するはたらしき、それが外ならぬ陶冶である。而してかゝる教養の必要を自覺させ、追求させることが教育の本質的課題の一つである。これがためには先づよりよく生きんとする強き生活力の陶冶、意志の陶冶がなければならぬ。この陶冶は既に明らかやうに、やがて教養の形成ともなる。我々が眞により良く生きんとすれば、それは同時に教養の形成をも意味すべきものである。こゝに教育の一の基本的な課題がある。殊に我々が事變下に於いて教育の問題を考へる時かく理解する事は必要である。

教育の課題の一を右のやうに考へる事が許されるとすると、それは一應人文主義的な見地であるとも考へられる。併し従來の人文主義的教育論は本書の他の箇所既に述べておいたやうな教養の國家的性格、根源的には我々の生命の國家的性格を忘れ、教養を單に教養とし、陶冶を單に陶冶として理解しようとしたために徒らなる普遍性の要求をなしたり、あり得べくもない一般的人間の自律性を設



定したりする缺陷を有してゐる。このためにこれまでの多くの教育學は煩瑣なものたらざるを得なかつたのである。一の神學たるの外なかつたのである。我々は本來國民としてのみ存するもの故、それが如何に教育さるべきかは、たゞ國家のみが決定する。ことごとしき教育目的論は我々には不要であらう。教育は國家の要求する世界觀を體認せしめ、これによつて自己の分に生かしむることを根本目的とする。たゞ國家のより以上の進展に即應すべく現在を超えた文化の理解が必要なのである。併し尙かくして得られた教養が如何なる實を結ぶべきかは、たゞ國家の要求のみが決定する。文化に具體性現實性を與へるものはたゞ國家のみだからである。

## 二

右を前提として女子、特に青年女子は如何に教育さるべきかを考へるのである

が、女子にとつて必要な教養が何であるべきかを先づとりあげることとする。

改めていふまでもなく、今日近世の個人主義的な思想の流を汲む凡てのものが批判されてゐる。個人主義の思想は勿論十分歴史的な意味あつての事ではあつたが、個人的な特殊なものよりも一般的な人間性の方を重視した。これに對し現代の思想は、とに角これまで無視されて來た、特殊なものの特許者としての認識を再び確立しようといふのである。その意味で今日は個人は社會の分肢としてのみ個人であることが力説される。即ち個人は自己特有の職分をもつ。之によつてのみ眞に個人であるといふのである。同様に男女共に各々の職分を果す事によつてのみ眞の男子たり、女子たり得ることを明らかにしようとするのである。

かくて一般にいはれてゐるやうに女子の天分が子孫を生産し養育し、又家庭生活を道徳的經濟的に維持し向上させて行くところにある事は明らかであつて、男子と同等の地位にあつての生活は勿論望み得べくも亦なし得べくもない。女子の



活動の固有の領域は即ち直接に社會的な、公的な業務にたづさはる男子に對していへば、それは家庭的な私的なものである。女子にとつて教育が必要なのもまさにこのためである。従つてそれは現行の高等女學校令が示してゐるやうな男子のそれをやゝ程度を低くして一二の教科を加減しただけでは不十分で、根本的にその目的によつて再組織されなければならない。このことが次第に認識されて來てゐることは大いに慶賀すべきことである。併し問題はこの天分をば最もよく果すためには如何なる教養を與ふべきかにあるのである。

かゝる教養の一つとして從來所謂家事科なるものが高等小學や高等女學校等にも課せられて、料理法の教授も行はれてゐる。併しそれは實際生活から遊離し、餘りに理論的であり、又高尚でありすぎて物の役には立たないといふ點で非難されてゐる。この非難は十分理由のある事であり、從來の家事教育の重大な缺陷の一を衝いてゐる。併し一方、各家庭の日常の炊事を改良して行かうとする限り、そ

の基礎として假令現在では高踏的であるとしても、將來のためにそれを理解しておく事は不可缺であると主張する家事科教師の言分にも我々は十分聞くべき耳をもたなければならぬ。同様なことは、天分達成のために從來選ばれてゐるその他の教科に關してもいはれると思はれる。即ちよくその天分を果すためには、單にそれらに就いて堪能であるといふだけでは不十分であつて、自分が現に果してゐるその果し方より外の果し方はないものか、と工夫し得る力がなければならぬ。即ちこゝに、先きに所謂教養のもつ意義が省みられなければならない。この教養によつてのみこの工夫の力を養ふことが出来る。近時往々實際教育家の中には、女子にはかのギリシヤ的な一般的教養は不必要であるとの意見を述べるものがある。それは勿論であるが、我々はこのことによつて廣い教養が一般に不必要であると結論してはならない。ギリシヤ的な教養が我々に無縁なのは、その教養の故にではなく、その觀想性の故にである。即ちそれが強力なる實踐への意圖と



の關係なしに好事家的態度で求められてゐるからである。かゝる教養は女子のみならず男子にも亦不要である。かくして女子にも、その天分の意義を自覺させ、その果し方を改善せしめるために、現實の國家、社會、文化が如何に動いて來、如何に進まうとしてゐるか、又現に女子に何を要求してゐるか、それを判然と知らせるべきである。これを知るの熱意をもたすべきである。その上にこそ天分に即した教育を行ふべきである。從來はかゝる教養が與へられたとすれば、それはこの天分とは無關係にであつた。天分との聯關を自覺することなしにであつた。このために現在の多くの所謂インテリ婦人への不信用があるのである。もしも女子に右の立場から眞の教養が與へられるならば、それによつて始めて女子は自己の生活に就いての眞の反省をなし得るやうになり、又正しくその天分を果し得るのである。

一般に東洋はその社會が家族制度の上に立脚してゐるところに特色がある。そ

れも西洋に見る如き横のではなくして、親子、又従つて祖先と子孫といふ縦の關係である。この點家庭は眞に緊密な結合をもつてゐる。併し一般社會に對しては閉鎖的であることを特色とする。これは支那に於いて特にさうである。それ故儒教に於いては親々の道といふことも説かれるし、家族内の事件は殺人等の重罪までも家族の自律にまかせるやうな立法もあつたといふ程である。又これは孝は百行の基といふ程に重んぜられてはゐるが、忠の方はそれ程でなくその觀念の成立は比較的後代、恐らく戰國から秦漢にかけての事であり、元來は汎く他人に對して眞心を盡すことであつたといふことによつても明らかであらう。即ち家庭が社會構成の有機的な分枝であるといふ觀念は十分には確立して居らぬのである。この點が我が國の家庭に就いての觀念の中にも從來影響してゐると思はれる。敷居をまたげば七人の敵のあることを覺悟しなければならなかつた封建的社會は特にこの事情を助けてゐる。かくて遂には家庭から社會へ出て行くといふ觀念をさへつ



くり出す。そこには家庭生活の社會的な性格の如きは全く考へられてゐない。家庭は社會に出て働くものの休息所であるにすぎない。このやうな次第であるために女子の天分が私的業務にあるといはれると、直ちに社會から疎外された家庭内の業務であると無意識の内に考へられてしまふ。所謂女らしさもかうした立場からのみ考へられてゐる場合が多いのである。勿論これだけでも、從來ともすると考へられがちであつた男女同權等の謬見に對しては十分意義ある事であつたのであるが、今日に於いては更に進んで、人は家庭生活を通じて社會生活、國家生活を營んでゐるといふ事を明確にしなければならぬ。從來のまゝでは個人主義的社會觀のもつ誤りをそのまゝに繰り返す懼がある。單に家庭の集合が社會であると考へられる嫌があるのである。個人が社會の分枝として考へられる以上に、家庭は社會の分枝でなければならぬ。單に良妻賢母主義をもつて教育されて來て、家計に、又家庭生活に忠實なる夫人が、時に不幸にも買溜夫人と呼ばれざるを得な

いのもこの點が明らかにされてゐないからである。今日國民精神總動員が聲のみ徒らに大であつて、必ずしもその功を擧げ得てゐないのも、家庭が國民的に組織化されてゐないからである。即ちまた家庭生活を主宰してゐる婦人が國民としての自覺をもたないからである。この運動は一には婦人をして自らも社會の、國家の有力なる一員たることを自覺させる事から始まらねばならぬ。その天分を通じて社會生活に參與すべきを自覺せしめ、また更に進んで現在では明らかにされて居らぬ參與すべき道を組織的に與へなければならぬ。女子の天職とされて來た家庭業務の概念は改新されねばならぬ。從來は家庭が社會から孤立させられてしまつてゐるために、その家庭を守る女子の天分も亦社會から遊離させられてしまつてゐる。我々はまさに特殊を特殊として理解せねばならぬ。併しその道はたゞ特殊を全體を通じて理解するにあるのみである。即ち女子の天分なるものも國家生活にとつての天分であり、又家庭生活もそのためのものであることを明らかに



せねばならぬのである。恐らく今後我が國民の大陸進出は不可避のことであらうが、その進出は男子のみが擔當する利益追求のためのものであつてはならぬ。國家理想實現のためのものであるべきである。それがためには、女子も亦この理想に燃えてゐなければならぬ。又女子として大陸經營に參與し得る資質をもたなければならぬ。更に經營者の勝れし母たるべきはいふをまたぬ。今後の女子教育はこれをその主要目的の一とすべきである。これがためには從來の女子の天分觀に基づいた狭い良妻賢母主義はもはや用をなさぬ。女子にも、國家的見地より見て自分が現に行ひつゝある天分の果し方より以外の果し方あり得ぬものかを反省せしめるために先づ國民たるの信念を涵養し、更に先きに述べし如き廣汎なる教養を必要とするのである。これによつてのみ女子は始めて有爲なる國民となることが出来る。從來は家庭人ではあつたかも知れぬが、十分な意味では國民としての配慮が足りなかつたのである。家庭人としての良妻賢母であるだけではな

しに、國民としての良妻賢母でなければならぬ。我々はこの事變を契機として、女子の價値を、女子の國民としての眞の價値を改めて認識しなければならぬ。

この必要は更に女子の天分が母たるにあるといふことから倍加される。母として生きるとは、我が國の次の世代を擔ふ子供の養育を引受けて生きることである。これがためにはたゞ現在の社會に生きて行く術を心得、臣民としての奉仕の道の立場から反省されてゐない天分に堪能であるだけでは不十分である。將來の我が國文化に對して規範的な意義をもつ文化戰——臣民としての立場を明らかにし、古典へのすぐれた教養をもち、正義の實現への強い意志、我が國の進歩を信じて疑はず、これを更に躍進せしめんとする旺盛な生活力をもつてゐなければならぬ。これなくしては子供を現在の狀況に束縛してしまふことになる。これはやがて國運の衰頹、文化の停滯を招來する。尙、母の愛はそれが拙く現はれる時、猿の愛と云はれる。併しか程の愛あつてこそ人は育つのである。この母の子であ



る我々は如何にしてこれを非難し得よう。非難する前に我々は先づこの愛を正しく生かす道を考へねばならぬ。これがためにも母をしてより廣き見地に立たせるの要があるのである。

更に附言しておくべきは、男子は學校を終へて後も外に働く故、その生活を通じて種々の知見を與へられる。耳により目により廣き教養を得て行く。又これを得ねばならぬことを自覺する。併し女子はこの機會に恵まれることが遙に少い。それ故現在の狀態に於いては女子にはこの教養は學校に於いてこれを十分に與へ、且つその必要を自覺させておかなければならない。

### 三

女子にもその天分を完うするために國家的な役割を體認せしめ、又廣き教養を形成することの必要なるを述べて來たが、女子の職業は所謂天分と如何なる關係



欠

**MISSING**



## 第六節 獨逸の國防と女子教育

### 一

ヨオロッパで世界觀といふ言葉が用ひられだしてからもう一世紀にも近い年月が經つてゐるが、それは云ふ迄もなく甲或は乙といふ個人の、又民族の一々の活動が悉く甲乙それぞれに固有の立場からなされてゐるといふ事實を承認したものである。それであるから例へばデイルタイが自分の哲學を世界觀の學として主張する場合には、それは從來の所謂理性主義的な立場の批判を通じて行はなければならなかつた。過去のいろいろの思想を一の普遍的な合理的な立場から、よいかよくないとか批判するのではなしに、それはそれとして十分の存在理由があるといふことを主張するものとして出發しなければならなかつた。こゝに世界觀



を主張する立場が相對主義といはれ、歴史主義といはれるいはれがある。

相對主義、歴史主義といへば何かより所のないぐらぐらした感じを持つが、我が歴史を持つてゐるといふこと自體、我々が本來相對的なものであることを示すのである。もしも我々が眞に確乎とした不動のものであれば、我々の歴史が何何時代として特徴づけられるやうな變化を示すといふことはあり得ない。我々の行ひの仕方はいつも一定で、従つて我々の歴史にも所謂歴史的な變化はあり得ないこととなるのである。

かうしてみれば我々が相對的な立場をとり、我々の一々の行爲にはその背後に悉く一定の世界觀が横たはつてゐる、我々の行爲はそれが正しいから行爲されるのではなしに、それを我々が欲するから行爲されるのであると主張しても、それは行き過ぎたとはいへない筈である。

今日獨逸で世界觀或は民族主義的見地が強く主張されてゐるけれども、こゝか

ら見れば決してそれは簡單に妄斷であるとか、非學術的であるとか批評さるべきではない。我々に從來學術的であると信ぜられて來た超民族的、その意味で無前提的合理的見地も、立場を變へればやはり一の相對的なものに過ぎないであらう。もしもこの超民族的見地が眞に我々にとつて根本的であり、こゝにのみ人間の本質があるとすれば、今日この超民族主義が凋落するといふ事態は何と評されよう。誤りであるといつただけではすまされぬ。然かく根本的なものが何故に皮相的？な民族主義的見地と交代しなくてはならなくなつたのか。かの根本的といふことは、この皮相的なものによつて假令一時的であるにもせよ、とつて代られる程に根本的！であるに過ぎなかつたのか。そこで我々は從來學術的であるところ來た合理的なものも、結局一時的相對的な、また近世のみに通用するところの、その意味で少くともその立場からすれば非學術的立場であることを承認しなければならぬ。この立場の歴史的な成立事情を考へれば、この關係は一層はつ



きりするだらう。

ともあれこのやうな次第で或る理論が民族主義的であるといふことは、それ自體何ら學術的であるかないかの基準となるものでないことを我々は承認せざるを得ない。むしろ我々にとつては、學術的であることの基準はその理論が、他の世界觀に立つ理論を十分に克服し得、而もその理論の構造が十分その立場から論理的であることの中に求められよう。その意味では理論なるものは本來論争的な性格のものである。

ナチスの立場がかうした性格を極めて豊富にもつてゐることは、それが共產主義民主主義との果敢な闘争を通じて生れ出たものである以上、何ら不思議ではない。この闘争的性格こそナチスの立場の本質であり、生命である。而して闘争は論理的であるよりも情意的である。従つて闘争の思想は、論理よりも情意を重んずる。ヒトラーはマイン・キャンプの中で明らかに言つてゐる。「大衆は教授でも外

交官でもない。彼等の見解は感情的であつて、理性に基づくものではない。強固なのは知識よりも信仰である。事實歴史上の大變革を齎したものは科學的知識ではなくして、ヒステリックでさへもある狂信的な感情である。その故に我々は大衆を獲得するために國民社會主義的觀念の一面のみを極めて強烈に、狂信的な迄に力強く提示しなければならぬ。」我々はこれらの言葉の中にヒトラーの、又ナチスの理論の性格、この上もなく旺盛な戰鬥精神を見出すことが出来る。

獨逸今日の教育、又女子教育の特質をなすものもこれである。

## 二

ナチズムの特色は勿論たゞ一色ではない。反共產主義、反個人主義、全體主義、權威主義、指導者主義など何れも重要な意義をもつてゐる。けれどもこれらはナチズムの世界觀、従つて又獨逸の諸政策の究極の根柢をなすものではない。むしろ



るこれらは民族主義を實現するための、大獨逸第三帝國を建設するための方策として樹てられたものであると見るべきである。即ちナチズムの眞の特色は民族主義的なる點にあるといふべきである。所謂アーリアン第一主義がそれである。

マイン・キャンプは「民族と人種」(Volk und Rasse)と題する文章に於いて詳細にその民族觀を呈出してゐる。一般にナチズムの民族觀は一種のダーウイニズムであるといはれるが、ヒトラーも、「生きんとする者は何人も戦はなければならぬ。この永遠の闘争を戦ひ抜かんとしない者は、實にこの地上に生くる甲斐なき者である」との見地から、「強者のみが支配せねばならぬ。強者は自らの偉大さを犠牲にして弱者と交はつてはならぬ。これを残酷であると思ふ者はたゞ生來の弱者のみである。この法則にして存立し得ぬならば、生の如何なる發展もあり得ぬであらう」と述べてゐる。弱者とは彼に依れば生くるに甲斐なき者の名である。「鵠鳥に對して愛情を示す狐もゐなければ、鼠に親しむ猫も居はしない。」凡ては戦

ふのである。

これは民族の關係に於いても同様である。「より強い民族は弱少民族を驅逐する。生きんとする要望は、かの人道主義の笑ふべき足枷を立ちどころに破碎して了ふ。それ故、民族國家は他國の利害に拘泥してゐてはならない。専ら自國民のために戦はねばならない。國際的感傷によつて未來の大が招來せられるのではなく、我が國家、我が民族のために戦ふ兵士によつてのみ輝かしい未來が獲得されるのである。」我々は民族のために戦はねばならぬ。民族が我々にとつて一切である。民族の大が我々の生き得る所以である。ヒトラーはかうして國民に民族第一主義を呼びかけるのである。

これがために世界の民族を三種類に分けて文化創造者、文化運搬者、文化破壊者の三とし、ゲルマン人が屬するアーリア人種こそ第一の文化創造者であり、我が民族こそ誇るに足り強化するに足る唯一の民族であることを説くのである。



今日の獨逸がこのやうに民族主義一色に塗りつぶされてゐる——尤もチエコを加へ、ポーランド西部を併せ、更にバルカンに進出した今後は、多少の變改がナチスのイデオロギ―に加へられるかも知れないが——ことは、獨逸の通つて來た宿命の道をたどつてみればなんら不思議ではない。前回の世界大戰に於いては善戰空しく敗れて、國家の面目はヴェルサイユ條約のために完全に蹂躪され、聯合國側、殊にイギリス帝國主義が少くともその一半の責任を負はねばならぬ戰爭の責を悉く背負はされ、のみならず、自民族の一部分は他國の主權下に呻吟することを餘儀なくされ、又ラインランドは彼等が本能的に嫌惡するフランスの黒人部隊の占領するところとなつてゐた。この屈辱は獨逸人全體にとつて耐ふべからざるものであつた。

これを救ふためには何よりも先づ國民の一致團結を必要とする。併し右にも述べたやうにゲルマン民族人口八千萬の中九百萬は他國——例へば嘗てのズデーテ

ン地方の如く——の主權下にある。これらをも把へて大獨逸建設に進むためには獨逸國內の國民の團結のみでは不十分であり、國外にある者をもこめて民族全體の同志關係が成立たなければならぬ。即ち國民的團結よりも民族全體の蹶起が望まれるのである。これによつてナチスにあつては國家よりも民族に重點がおかれ、「國家は一民族によつて生命のための永遠の戰に使用さるべき偉大な強力な武器である。それは共同の意志を表現するが故にあらゆる者が服従しなければならぬ一の武器である」(マイン・キャンプ)とされ、又「國家は一の單なる手段であつて目的ではない」(マイン・キャンプ)ともされる。これは我々日本人の感情からいふと奇怪である。併し獨逸人にとつては不可避の、又當然の結論であるであらう。獨逸人にとつては獨逸國家は歴史を超えては何ら神聖な、又讃ふべき價值をもつものではない。獨逸人の文化は歴史を通じて共通のものがあり、又偉大な業績を残したけれ共、獨逸近代國家は漸く十九世紀に至つて統一されたにすぎない。そ



れも尙完全な統一ではなく、聯邦にすぎなかつた。完全な統一はヒトラーによつてなされた。國家がかゝるものであるとき、獨逸人にとつては國家は自ら規範的な意義をもつものではなく、民族こそが彼等の全體を把へ、民族こそが精神に喰入る價値あるものである。

獨逸の政策はことごとくこゝから出發する。教育も民族のための教育である。民族の今日を確保し、明日を守るための教育である。

### 三

ヒルラーはヒトラーの教育意見をマイン・キャンプやその他多くの演説の中から取出して紹介してゐるが、その全體的な特徴として、我々の教育的目標は民族の成長にあるといつてゐるが、これは極めて要領を得た表現といふべきである。ヒトラーが國民政治の第一の、そして最高の使命は我が民族を精神的に意志的に再

統一するにあると云つてゐる事を思へばこれは直ちに承認されよう。又ヒトラーが民族國家の教育の任務は、第一に筋骨逞しき身體、第二に精神力、第三に知識を鍊磨するにあると規定する所以は、假令科學的訓練が薄弱であつても、身體が健康で善良且つ確乎たる性格及び決斷力意志力に秀でてゐれば、民族共同體に對し精神的訓練ある弱者よりも遙に多くの貢獻をなし得るのみならず、かゝる薄弱者はこの地上に存在することすらも不可能であるといふ見解に存してゐることからも明瞭であらう。要するに教育を決定する唯一のものは「民族」なのである。

本論が主として扱ふべき女子の教育にしてもその根柢は、女子が女子として民族に對し最善の貢獻をなし得るやうにといふ點にある。従つて女子教育に於いて何よりも先づ心されなければならないのは、女子を母として、明日の民族を擔ふよき母として、眞の獨逸國民全體の母としてこれを育てるといふことである。ここでは男子にも女子にも、イギリス人にもユダヤ人にもあてはまるやうな文化の創



造に參ずる能力あるものの養成といつたやうなふうの考へ方は全然見られない。いつでも視角は民族生活からである。女性の價值もたゞ民族生活への價值としてのみとり上げられる。婦人はたゞに次代國民の親となる許りでなく、民族共同社會の根本である家庭を主宰して子女の教育に當り、民族生活の中に常に生き恒にこれを導いてゐる民族精神を、言語、傳説、童謠或は道具の使用法等を通じて次代へ傳承する。これは實に女子の任務である。従つて女子の名に値する眞の女子は、内外の文化に通曉した教養の豊富といふこととは全く無關係に、身體と物の感じ方や氣の配り方が健康で、民族共同體に對し、また次の世代に對しての責任を知り、我が民族を維持することが自分の唯一の生命であると觀じ、單に個人的なものは無意義で祖國獨逸が一切であることを知つてゐるものであるとされる。けれどもこのことは、奴隸にとつては國家が一切であり、これに奉仕することこそその存在意義を完うするものであると、勝れた古代ギリシヤの指導者たちまでが考

へたやうな見方とは何らの共通點をもつものではない。女子は國家に奉仕すべきものではあるが、決してその奴隸ではない。否、かけ代へのない同志として民族の創造的生活の根幹をなすものである。それ故一九三四年に新しい教育のために寄與しようとして書かれた一の書物は、女子の使命は、その愛と眞實により、又直接的な交際をもつことによつて人々の心を一にし、民族を外部に對して防禦する男子に仕へることによつて民族の防禦を可能にする點にあると考へ、更に人間の又民族の中核をなす道義の源泉は母が中心をなしてゐる家庭の中にあり、その意味で母は民族道義の擁護者であるとさへも主張されてゐる。

女子をこのやうに評價するといふことは、ナチスの立場が、女子を男子と同じ人間とはみてゐないといふことを示すだけで、女子を貶價したことはない。もともと我々個人を獨立した生活單位と考へるのが誤りであると同様に、男子と女子とは同質的に考へるべきものではない。寧ろ異質的な人間として考へらるべ



きであつて、人間は本來男子と女子との結合された時始めて成り立つものといつてよいのであらう。一九三八年の一雑誌も、かうした男女の綜合統一のみが凡ての創造的生活の根源であるといつてゐる。従つて男女に對する評價の仕方の異なるのは當然で、女子に家庭への復歸を要求し、所謂女子の勤めを説いたとしてもそれは何等女子を、知識人のこよなく愛好する文化から閉出さうとするものではなく、むしろ新たな文化への道を招いてやらうとするものである。右に引用した論文の筆者はナチスこそが眞に母性を民族文化創造の根源として認識するものであることを自負してゐる。

それではどんな仕方では新たな道の開拓は行はれようとしてゐるかを問はう。

#### 四

内務大臣フリックは一九三四年に行つた演説に於いて「我々の母に望むところ

は出来るだけ多くの健康な子供を産み、これを將來獨逸民族の有能な一員となるやう教育し、以つて國家が今日彼女等に拂つてゐる格別な配慮と尊敬とに應へることである」と直截に述べてゐる。産まれた子供が健康であるためには先づ母が健康でなければならぬ。女子にとつても健康であることが第一の條件である。こゝで女子教育にとり體育が極めて重要な意味をもつものとされる。併し注意されなければならぬことは、フリックに於いて、又ナチスに於いて意味される健康な子供といふのが、ゲルマン民族の血を承け、ゲルマン民族固有の精神に強く生き得る力をもつた子供であるべきことである。それ故母は單に肉體的に健康であるのみでなく、種族的にも健康でなければならぬ。即ちゲルマン民族の血を正しく傳へたものでなければならぬ。このためには普通の體鍊の外に血の純潔を保つに必要な生理學の知識が十分與へらるべきである。既に述べたやうにゲルマン民族がその一つであるところのアーリアン人のみが文化創造者の名に値するとさ



れるのであるから、かうした配慮は極めて當然なことといふべきである。

又ナチスの立場からすると、母であるといふことは、家庭の、更に民族及び國家の支持者であり、保護者であるといふことであり、これは自然により神によつて女子に與へられた至高の義務である。これなしには獨逸民族の更生はあり得ない。獨逸民族共同社會の將來を荷ふものであるといふ自覺をもつた母の手によつてのみ獨逸には輝かしい將來がある。けれどもこの輝かしい將來も、母たちが家庭への、民族への犠牲的獻身を覺悟した時にのみ期待される。この犠牲的獻身こそが母性の表現であり、内容である。これなしに母性の慈愛に満てる生活はあり得ず、又民族の永續性もあり得ない。民族の將來にとつては次の世代のものが榮譽の何たるかを體して民族のために生き、自己の生活や安全のみを願はず民族のために敢然として進むようになることが必要であるが、これを可能にするのは實にこの獻身的な態度である。我が子ならずとも道に迷へる子を我が子として養育する犠

牲的な愛である。そこでかうした婦徳の涵養こそは古代獨逸婦人に於いて強く認められるものであるが、又今日の女子教育の一の重要な任務となつて來るのである。

右はガルベの意見であるが、彼は更に母とし妻として古代獨逸婦人が如何に高い婦徳をもつてゐたかを説き、今日の女子教育の規範たらしめようとしてゐる。このためにタキッスのゲルマニヤから引用してその母性愛の如何に強いかを示し、又妻としての古代獨逸婦人が、自分の趣味や天賦をのばすためにではなしに、辛苦をいとはず幸不幸を問はず夫と運命を共にし、もし夫が戰場に於いて傷つき家に歸れば妻はこれを激勵しその同志として協力し、敵來らばこれを夫と共に敢然と邀つた許りではなく、戦ひに敗れ、ばやがて加へられる焙刑をも恐れなかつた、と述べてゐる。妻としてのこの態度は又彼女たちの子女教育の態度でもあつた。嚴にして慈。これによつて能く子女を鍛へ、獨逸民族の眞の一員とすること



が出来た。かうした母をめざして教育することがまた今日の母を形成する途であるといふのである。

このやうに妻とし母としてその本分をつくすことが女子の本質であり、天與のものであるならば、女子にとつては凡てはこの點から評價される。従つて母に持つべく期待される教養は何よりも民族共同體の根柢をなす家庭生活の道德的經濟的維持能力の涵養に重きがおかれる。こゝに女子の家庭への復歸が要求される譯である。もとより一九三三年ナチスが政權を獲得した當初、家庭に歸つて職場を男子に渡せと女子に呼びかけたが、これには失業問題の解決といふ社會政策的な意味、又一方には人口政策的な意味もありはしたが、併しそれは決して單に政策的なものではなく、女子に對するナチスの根本的な教育政策に根差すもので、今日尙この根本的な方針に於いては何等の變改も加へられてゐないといつてよい。一九三六年ヒルラーによつて書かれた文章にも女子を母として教育することが獨逸

の再建にとつて不可缺の條件であり、而もこの再建は理智によつてよりも女子の本質である血と情熱の力によつてなされなければならぬとされ、又一九三五年にかゝる意味の女子教育の典型を古代ゲルマンに求めたがガルベは、一九三九年に至つても同様の趣旨を筆を新たに述べてゐる。

けれどもこのやうに家庭へ還るといふことは、前にも述べておいたやうに奴隸として奴婢として夫に仕へるためではない。これはガルベが今日の獨逸女子教育の模範と考へた古代ゲルマン婦人について述べるところからも明らかである。即ちそれによれば、古代ゲルマン婦人にとつては結婚生活は夫との一生涯の共同生活、運命を共にする終生の共同社會を意味してゐた。そして新婦が新夫から受取る祝の品とは裝飾品や娯樂物ではなくて、牛、馬及び武器であつたといふ。これはガルベに依れば古代ゲルマン婦人が夫と同等の立場に立つて共同社會生活を形成してゐたことの證據である。この點に就いては更に、古代ゲルマン婦人には男



の意志と意欲とに完全に従屬して了ふといふことはそれが愛より出づるにもせよ自己感情の缺除に依るにもせよ全くあり得なかつた。却つて男子が薄弱である場合には自分の責任をもつて事を斷行し男子の同意を求むることさへもしなかつたといふ事實、又一旦事ある場合には率先戰鬥の準備をなし、敢然男子と共に戦つて恐れることなく、その忠實と指示とは戦時の一々の行動に決定的な影響を與へたといふ事實をタキツスのゲルマニヤから引用してゐる。

このやうな叙述からも我々は家庭への復歸といふことがナチスの立場から如何に解されてをつたかを十分に知ることが出来る。ガルベもいふやうに若き獨逸の娘等にとつては結婚と母性とが窮極的價値をもつてゐるのであるが、それは決してたゞ臺所の仕事や裁縫のみをしてをればよいといふものではない。この點についてヒルラーはもつと明瞭に、女子にとつて家庭婦人（ハウスフラウ）として生きることは寧ろ外面的な補助手段であつて、要は高き創造力を發揮することにある

といつてゐる。即ち女子は單に家庭婦人として男子に仕へるのではなしに、男子と共に家庭を通じて民族共同社會を生きるのである。こゝに家庭が民族共同社會の根源細胞であるといはれるいはれがある。従つて又創造し發展する民族に於いては、女子の創造力が強く要望されるのである。

ではどのやうな仕方での創造力は發揮されるべきものなのか。もとよりそれは右に述べて來たところからも明らかやうに、母としての道を通じてより外にありやうがない。將來獨逸民族を擔ふものとして我が子を育てるといふことそれ自體が、尊ぶべき民族的創造生活に參ずるものである。即ち母としてのつとめを果すことが、たゞちに民族的創造にたづさはることであり得るのである。併し、母として子女教育の任務をよく果すといふことは並々ならぬ勞苦である。これはフリックのいつてゐることであるが、たゞ高級のすぐれた女性のみが、子女を道義的に教育して獨逸の輝かしき將來を獲得することが出来、祖國獨逸の國民とする



ことが出来るのである。従つて先づ母自身が十分に國民社會主義の精神で鍊磨されてゐなければならぬのである。

この點に於いてナチスは女子教育にもそれが十分政治的であることを要求する。もとより今日獨逸で政治といはれるのは、シュブランガー等に見られたやうな、凡てより大なる價值をもつものは權力的であり、その價值は政治性をもつといふやうな人文主義的個人主義的なものではない。國家への、國家からの關係は悉く政治的である。この意味での政治性、即ち女子は民族への奉仕者としてのみあるべきであるとの要求がなされるのである。従つて女子にとつて最高のものとして要求されるのは、民族全體に對して母としての自己の責務を感じ、これを遂行する母性である。それ故この母性は單に本能的なものである許りでなく、恒に民族的自覺によつて裏づけられてゐなければならぬ。家庭が民族生活の單位である。併し單位としての機能は、家庭が民族全體への關聯の中に入つて働く場合

にのみ果される。家庭を守りつゝも家庭を超えて民族のためといふ自覺がそこになければならぬ。これが單位の意味である。

家庭についてのかうした自覺は、家庭が共同體精神を涵養するに最も適當な場所であるところから特に必要であるとされる。既にのべたやうに家庭は民族共同體の根源細胞であり、家庭に於ける人格的結合が民族共同體に於ける結合關係の根本型式であり、特に親子關係に於いてこの型式は明らかに存してゐる。又共同體に對する個人の心構へなども、家庭の中では自己本位の希望などは直ちに抑へられるから、最も簡単に養成される。而も家庭は民族的道義の存せられる場所であり、民族精神を端的に表現する童謠傳説の如きも家庭に生きてゐる。殊に母を通じて傳へられこれが子女を早くより民族的に養ふのである。かくの如く家庭のもつ民族的教育的意義が大であるだけ、家庭自體が民族の成長を促進しそれに少くとも適應し得るものでなければならぬ。それには家庭の精神内容を左右する



母が先づ民族的精神ナチス的精神に生き政治的自覺をもたねばならぬ。

## 五

家庭人として——妻として母として生きることが女子の本分であり、これによつて女子は民族的創造に参じ得るといふナチスの思想を右に述べたのであるが、この立場から女子の職業生活はどのやうな評價を與へられるであらうか。職業に就くといふことは一應家庭を主とすべしといふ要求に反してゐる。併し他方では女子の就業は益々増加する傾向にある。殊に今後當分續くものと思はれる世界的動亂は男子を多數戦線に送る結果、女子の就業を必要としてゐる。この點でナチスの女子職業觀は我々の興味をひくのである。

もとより原則としては熟練を要する職業生活は男子の領域であると考へられてゐる。併しそれは勿論近代になつてから生じた工業勞働についてのことで、農業

には古くから女子も参加してゐたし、又その他の家庭内で行はれる職業には凡ての女子が参加し得るやう準備されることは望ましい。これは勿論不熟練的職業である。だがこれらについての能力とは、八百屋の内儀は青物についての知識をもちそれを賣る術を心得べきだといふ迄のことで、我々が今考へようとしてゐる職業ではない。我々の問題にするのは、一應結婚の目當がないために求め、或は自ら職業婦人として立たうとの意志をもつて特別の職業を求めようとする女子の職業についてであるが、この場合には女子がその職業に就いた結果民族全體が向上し、のみならずやがて妻として母としての生活に少くとも不都合なることのないやうな職業が選ばれなければならぬ。例へば保母、看護婦、家政婦、女教師、裁縫師、賣子のやうな女性の天分に合し、或は俳優、音楽家、畫家、詩人のやうな個性的天分に適したものがそれである。勿論これらの職業に就くといふ事は、これによつて女子が男子と權を争ふためではなく、互にその職分を守つて、強力な民族文



化を形成するためである。男女の共同によつてのみ凡て創造生活は可能である。こゝに女子の職業生活の意義があるのである。併しもとよりこれがためには女子の職業が全體として女子のために選ばれ、女子のために組織化されてゐなければならぬ。男女何れもが就き得るやうな職業が職業の大部分を占めてゐる現状はこの點から、改められなければならぬ。ナチスはこの點に對しても種々の考慮を示してゐるやうである。

けれども獨逸の現實は、現に戰爭を遂行中であり、一般にも大いに人手が不足してゐる。この人的資源の相對的不足は戰後には更に一段と甚だしくならう。といふのは勞働能力ある男子は戰爭によつて消耗し、熟練工も不足しよう。加ふるに一九三三年迄の經濟的不況に加へて個人主義的思想の結果出生率は低下して、爾後勞働人口を甚だしく減少せしめてゐるからである。これを補ふには女子の参加を求めると以外にない。又他方では戰爭の結果生産工程の再分化、單純化の現象が

現はれ、これへの女子勞働力の参加が要望され、かうして産業構成自體も女子の産業界進出を著しく要求してゐる。これは今後當分繼續する傾向と見るべきである。然るに忘れてはならぬことは、他方男子の手不足の結果、家庭の仕事や幼児の教育は以前にもまして婦人の手を必要としてゐることである。この點からは既婚婦人はあく迄家庭にあつて家を守り、次代の獨逸民族を守らねばならぬ。民族の運命を決するものは民族人口の量であり質である。これの確保向上は一に婦人の手にまたねばならぬ。こゝに女子は二つの相異つた要求を與へられてゐる譯である。即ち一は家庭を守れとし、他は家庭にあるよりも職に就けといふ。兩方の要求を満足させて問題を解決するには、勿論未婚女子の勞働力利用といふ以外にあり得ぬことは明瞭である。そこでナチス政府は各種の手段を用ひて彼女たちの産業参加を求めてゐる。これがために特別の職業の教育も行つてゐるが、一九三六年の結婚調査によれば、二十歳から三十歳迄の婦人についてみると二十三歳迄



の間に約三〇%、二十五歳迄の間に約五〇%は結婚してしまふ。さうすると産業界に動員可能な女子はそれ迄の年齢のものに限られる事となる。そこで職業教育は極めて短時日の間に終了し、極く専門的になることが望まれる譯である。ともあれかうして未婚女子を産業界に動員するといふのがナチスの計畫のやうであるが、これは勿論先きに述べた女子の職業生活と母性保護との矛盾を克服し、産業界の要求を充足しようとするものである。併しこれだけでは就業婦人の母性的教養に缺くるところなしとしない憾があるので、婦人聯盟その他を通じ母としての教育を得さすべく種々の企てがなされてゐることは後述の如くである。

これでナチスの女子職業観は、職業は主として母性に適したるものを選ぶべく、又現實問題としては能ふ限り未婚女子を動員し母はこれを家庭の人たらしめる政策をとつて、職業生活と母性との調和を計らうとしてゐることがうかゞへる。而も就業者の母性的教養には多大の努力を拂つてゐる。こゝに於いても我々は女子

は民族に母として奉仕せよといふ根本觀念が一貫してゐることが認められる。

## 六

我々は既に獨逸に於ける民族主義が闘争の原理として成立したことを見た。女子の教育も究極に於いて民族への奉仕を目指すものであつてみれば、その教育もこの闘争、戦争への一の準備といふ意味を常にもつてゐなければならぬ。廣義には女子の本務として考へられる健康な子女を生み、これを民族共同社會の有能な一員として育成するといふこと自體、戦争への意味をもつものである。といふのは本來民族共同社會そのものがナチスの立場からは一の恒常的戦争態勢にあるものだからである。

かくして女子教育も國防的觀點から考へられなければならぬのであるが、それは決して女子を兵として動員しようとするものではない。この點今次歐洲大戰に



於いて英佛が女子を戦線に驅り立てたのとは全く趣を異にする。ヒトラーも一九三六年ニユールンベルグの黨大會で、我々は健康な男子を有する限り——我々國民社會主義者はこのために活動してゐるのであるが——獨逸に於いては女子が武器をとつて起つことは全く必要でない。併しこれは何ら婦人を貶價しようとするものではないと述べてゐる。従つて女子に要求される國防訓練は、國防技術の訓練ではなしに、國防意志への訓練である。即ち勇敢であるとか秩序を重んじ持續性があり決斷力に富み責任感が旺盛であるといふやうな徳を得させる事もこの意味をもつてゐる。勿論獨逸史獨逸文學等を教授し民族への愛を盛んにするといふやうなこともこの點から意義づけられるべきものである。ナチスの突撃隊が共產主義と如何に戦つたか、ヴェルサイユ條約が我々に何を與へたかを知らせることなどもそれである。併し單に獨逸民族が如何に勇敢な働をしたか、戦争が如何に戦はれたか、行軍の有様はどうであつたか等を女子の感情に訴へるやうに與へられ

るのみでは不十分で、強固な國防意志をもつて國防問題についての明確な見透しをもつやうに教育されなければならぬ。

かうした主張が一九三七年末の「獨逸民族教育」誌に出てゐるが、この最後の言葉は我々に教へるところが大きい。我が國では戦争を現象的に理解させようとはする。併し戦争の見透しを與へることの努力は極めて乏しい。それは國情の差にもよるのであらうが、喜ぶべきことではあるまい。ともあれ、このやうな見透し、即ち軍事行動の必然性を理解しこれを他の者にも明快に説明し得るやうな力をもたせるといふことは、該誌にも記されてあるやうに、男子は戦場にあつて戦ひ、國民全體に戦争の意義を徹底させる重大な任務が女子に課せられる今日、極めて緊要のことといふべきである。家庭婦人が（それに新聞紙も！）たゞ米炭の不足をかこち、スフの弱さを慨くのみであるならば、國民精神總動員の實績上らざるは當然である。のみならずかくの如くしてはやがて戦争を厭惡するに至らしめ、



勇氣を消失させる。かくて女子にこの見透しを與へるといふことは國民の戦闘意志を形成する上に重大なる役割を果すものである。

更に地圖の讀方、天候の知識、その他日常生活にも直ちに用ひ得る軍事知識を與へることは、やがて人の親たる女子にとりては國防思想涵養上また重要である。尙又注意さるべきことは必要とあらば女子を動員し得るやうに準備しておくことである。これは勿論武器をとつてではなしに、看護婦として防空技術者として、或は男子の戦場の代員としてである。この點からも女子に常時物理化學或は機械について知識竝に關心をもたせておくことは、是非ともなされなければならぬことである。これは平時の生活に於いても、特に重要視せらるべきものである。その意味でこの教育は女子にとり極めて大切なことで、間接に國防能力の向上に資するところが大である。

女子教育への國防的要求については右のやうなことが考へられてゐるやうであ

るが、我々はこゝにも女子の民族生活に於ける役割についての周到な見解を見出すことが出来るのである。

## 七

以上大略女子の教育に對して何が要求されてゐるかを見たのであるが、かうした要求がどんな形で果されようとしてゐるのか、その特色を簡単に述べることとする。

勿論教育の方法は何を與へようとしてゐるかによつて決つて來る。即ち主として多くの知識をもつことにより國民生活が豊富となり、向上するならば、各種の知識内容を獲得させることが教育の中心となるのは當然で、所謂主知的教育が繁昌する。何でも知ればいゝのだから、知のまゝに動けばいゝのだから、理智とは直接關係のない國家、民族のための奉仕といふ風なことはこゝでは、全然問題の圈



外にあることとなる。知が本来要求する合理性が一切の基準となる。併しナチスの求むるところは要するに民族の發展向上に資し得るやうな人間の形成である。單なる知ではない。それ故教育の仕方は、兒童生徒を學校へ罐詰にして教科書に縛りつけるやり方とは全く異つたものとなつてこなければならぬ。教育はこゝでは民族生活への訓練なのだから、教育は民族的自覺をもたせると共に極めて行的な形で行はれなければならぬ。こゝにその特色がある。かうした自覺をもたせるためには獨逸民族史、獨逸文化、種族理論等を教へると共に、體育の時間を延長してその振興につとめてゐるが、こゝでは他の特色を見よう。

督學官ヘードウイッヒ・フェルスターは、少くとも國民學校の上級に於いては教育は男女の間にその本性に基づき異るところがなければならず、そのためB・D・M（獨逸少女團）の如き施設による教育が肝要であるといつてゐるが、これは明らかにナチスの意圖する教育が單に知育を求めるとでなく、男女各々の分に基づく民族

への奉仕にあるからである。もしも知育が教育全般に於いて主流をなすものならば男女の間に別のあるべき理はない。B・D・Mはもとよりヒトラーユーゲントの一部をなすものであり、學校・家庭と協力して、民族共同社會に身をもつて奉仕せんとする性格を鍊成し、それを遂行するに足る強健な身體（全活動時間の三分の二をこの鍊成に費してゐる）とゲルマン的文化創造に參するに足る知性の涵養をめざすものである。これはたゞ學校で書物と首引してゐるのでは不十分で、そこからはかゝる能力は全く養はれない。のみならず學校に在學してゐるものと職場にあるものとの連絡も計らずに放置しておくならば、それはいふまでもなく國內の精神統一上多大の障害を來すことは明瞭である。そこでその間に相互の連絡了解をもたらすことが肝要である。如何なる位置にあるものも、その如何を問はず一丸となつて民族共同社會に奉仕するやうにせねばならぬ。學校の教授も専らこのためのものであるべきである。たゞ學校のみではともすれば知に偏し個人に執す



るの權がある。そこでこれを補ふ組織としてかゝる團體が形成されるのである。

B・D・Mは女子教育全般に對して要求されることを實現するために旅行團を組織して自國の風土に接し、祖國の偉大なる傳統を目の當りに認識して心深く刻みこみ、又會館の夕を催しては祖國愛に基づく劇・音樂を上演し自らも合唱し、或は短期間の野營生活を行つて一體觀を養ひ、更には一九三三年末以來義務として毎週一回スポーツ時間に參加しては次代民族社會を支へるに足る體力と意志を鍊磨すると共に團體精神を涵養するなど各般の活動を行つてゐる。分けても注目すべきは、勞働奉仕である。これは一九三〇年から一九三一年にかけて男子と共に始つてはゐたけれども、參加する仕事洗濯とか料理とかいふものに限られた關係上極く一部に止つてゐた。併し一九三四年にシヨルツ・クリンク夫人が國女子指導者となつてからこれは本格化した。勿論男子の場合のやうに例へばジークフリート線を建設するといふやうな緊急の要に應ずるものはなかつたけれども、

國家の社會政策的要求に照應した仕事は彼女たちの手を待つてゐた。即ち勞働力が不足し過勞に陥つてゐる農村婦人や工業都市の婦人に對しその家庭に於いて助力するといふやうな、女子の本性に合した勞働である。而もその奉仕の仕方男子の場合の如く隊伍を組んで參加するのではなく、數名の班に分れて奉仕するのである。男女の分は奉仕の對象についてのみでなくその仕方についても嚴重に守られてゐる。一九三四年から翌年にかけては參加者は一萬人に限られてゐたけれども、一九三九年には農村の收穫や家事の手傳に參加した者は四〇萬を超え、その延日數は六百萬日にも及んだ。各種社會事業の手傳ひ、赤十字、兒童園の仕事、子供多き家庭への手傳ひ、或は病人の看護を世話した者などは、その外に二〇萬以上に達してゐる。又B・D・Mの全團員が今次の戦争に際して防空關係或は廢品回收等の業務に參加して大きな功績を擧げてゐることはいふまでもない。

からした勞働奉仕が諸他の訓練にもまして女子の民族への奉仕觀念を養ひ、そ



の意味で民族的政治的教育に資することは極めて大なるものがある。それといふのは、これによつて彼女たちが参加する労働の民族共同社會への聯關を體認することが出來、これによつてやがて民族共同社會に參ずるの態度が遺憾なく形成され、又民族的共同社會生活に必要な知識も得られ、獨逸的民族的性格を確保することが出来るからである。

ナチスの教育方法の特徴を示す他の例はその卒業生及び職業に現に就いてゐる者の教育の仕方である。八ヶ年のフォルクス・シューレを終了後高級の職業に就かうとするものは五年乃至八年の獨逸女子上級學校（ドイツエ・オーバーシューレ・フユール・メーティヒヘン）に入るが、五年修了のもの、八年修了のものも何れも特に女子の天賦に基づいた保姆、家政補助婦、家政看護婦等の職業に従事するやう配慮されてゐる。即ち家事的職業に就きこれを通じて獨逸の各家庭の文化的向上に資し、全獨逸民族の發展に寄與する事が求められてゐるのである。又注意すべき

は八年の課程を終了して教職に就かうとする者は、これは男子の場合も同様であるが、否、男子の方が義務化されてゐなかつた場合にすらも半年の労働奉仕を終へて後始めて上級教員養成所（ホッホシューレ・フユール・レーラービルデウング）に入ることとなつてゐる。即ち言語科を修めて文學の教師になる者も、半年間十分獨逸民族共同社會に屬する女子としての訓練をうけて始めてその資格が附與されるのである。文學に關して普通人よりも少し許り豊富な知識をもつた者がその上教育學や教育史の講義を一二單位聽けばそれで文學に關する國民教育者としての資格が與へられるといふことはこゝでは全然考へられない。要するに根本的に女子としての、將來妻となり母となる女子としての教育がこゝに於いても亦意圖されてゐる譯である。

一九三八年七月以來、上級學校に入學せぬ男女にとり義務制となつた補習教育機關としての職業學校（ベルーフス・シューレ）、これは五年修了のオーバーシューレ



を卒業して入るゲベルベ・シューレとは別である)はナチスの極めて力を注いでゐるものであるが、この義務年限は都市では週九時間づつ三年、農村では週四時間づつ二年とされてゐる。勿論これには男女各、に對し設けられてゐるのであるが、女子に於いては、家事科、職業科、店員科と分れてゐる。何れも女子の本性に基づくことはいふ迄もない。例へば家事科では娘や家事使用人に料理、裁縫、家政、育兒、看護等を教へ、實習を幼稚園や託兒所で行つてゐる。農村にはこれが多い。店員科にはタイプライティング、速記術、販賣術等を教へ、職業科では齒科醫師、寫眞師、美容師等の職業に應じこれに家政學科を加へたものを教授してゐる。尙比較的家事的性質を帯びてゐない職業に従事する者のためにはB・D・M、勞働戦線(アルバイツ・フロント)等によつて格別の考慮が拂はれてゐる。

學校の形をとらずして行はれる職業教育には獨逸婦人聯盟、獨逸勞働戦線、及び聯盟に屬する母性奉仕團等の社會團體の主催によるものがある。これらの團體

が活動を始めるやうになつたのは、近時の經濟生活の轉換に伴つて女子が從來のやうに家庭で家事についての教育をうける機會が少く、從來ならば布も家庭で織つてゐたから自然とその性質も知り使用に當つての注意も自ら體得出來たが、今はこれがないため、他の方法をもつてこれを與へようとするところから出てゐるのである。尙この外には、本質上知的訓練を主とする學校を出、H・Jの鍊成をうけて社會人としての一般的教養を得て實社會に入るといふだけでは、直ちに共同社會の一員として十分活動することは出來ないといふことも考慮すべきである。右の一般的教養と、現實の共同社會が必要とする教養との間には必ずしも連續的關係がないといふのがナチスの見解である。(ありとするのは勿論人文主義の立場である)従つて眞の共同社會人として現實に活動するためには、共同社會自體が教育作用を營まねばならぬ。即ち教育は常識的な意味で社會人となる迄(從來の教育はこれ)に限らず、社會人となつてしまつて後も尙社會自體が教育せねばな



らぬのである。具體的に職場を通じての教育が一般的教養の學校教育とは別になされねばならぬのである。こゝにナチの社會教育の、否、教育全體にとつての大きな特質がある。そこで獨逸婦人聯盟の如きは相談所、講習會を開き、或は映畫、放送、出版物等を通じて一般的な啓蒙運動を行ふ外、特に女子青少年を對象としては家事學年、二年制家事講習を開き、一九三八年度に於いて前者に約四萬、後者に五千八百の女子が參加してゐる。これは特に農村家庭の勞働不足を補ふといふ意味もあつて、學校やナチス教員聯盟の助力の下に在學中の女子を家庭に配置して具體的な家事教育を實施してゐる。尙これが參加者に民族的連帶觀を與へ、女子の本分を理解させる上に多大の効果をもつことはいふ迄もない。

又勞働戦線は母性奉仕團と共同して工場内に工場母性學校、寄宿制母性學校を設け四週間の課程で、ともすれば主婦たり母たり、或は現に然らずとも將來その民族的義務を負ふべき未婚女子に對して家事と體育を中心とした教育を行つてゐるが之は省く。

尙勞働戦線の婦人局では終業後に家事に關する集會を開き、或は工場内に模範炊事場を設け、調理表を無代配布したりして、母性的教養の向上に非常な努力を拂つてゐる。(勞働戦線が「全國職業競技」の制度を設けて職業教育を行つてゐるが之は省く。)

右の如く今日の獨逸に於いては學校教育と並び、或はそれ以上に婦人聯盟或は獨逸勞働戦線の如き學校外の團體により具體的な生活の場に於いて行はれる教育が極めて重要な意味をもつてゐる。我々はこれに多大の注意を拂ふべきである。

要するに獨逸民族のために計ることがナチスの政治であり、獨逸民族のために一切をささげる人間の形成がナチスの教育である。従つてこの教育の場所はもはや従來のレルン・シューレ(學習學校)ではあり得ない。學習によつて得られるものは民族共同社會に對して捧げらるべきものたゞ一部、而も極めて貧弱な一部に



すぎない。性格の陶冶、分けても今後尙闘争の渦中にその偉大さを發揮しなければならぬ民族の一員として行動し得る性格と能力との鍊成は行動を通しての訓練にまつ外はない。かくして今日獨逸民族がもち得る教育形態は、學問の教授を主として發達した學校を中心とすることなく、却つて我々が右に見て來たやうにB・D・Mなどの協力によるところが大きいのである。また我々が好むと好まざるとにかゝらず民族的抗争の中に投げ出されてゐるとすれば、民族の自立を望む限り、民族的なものは何よりも先きに教育的價值をもち得るものとなる。それは決してその民族的なものが理論的にいつて正しいからではない。正しさが故に教育的價值ありとするならば、教育的價值ありとされるものの中には非民族的なものさへも取り入れられることとならう。正しさはこの場合超民族的なるべしとされてゐるのであるから。併しナチスの立場はこれとは無縁である。彼にとつては民族が一切である。従つて婦徳の養成にあたつても古代獨逸婦人の生活がその典型

と考へられもしたし、何としても個人的鍊成を離れ得ない學校ではなしに、職場の如き民族共同社會の構成單位自體の教育的機能が重要視せられるのである。我々はこの點に大きな理論的關心をもつものであるが、ともあれこのやうな教育觀が獨逸民族の將來にとつて榮光をもたらし得るものであるかどうかは、歴史にのみその回答を求めねばならぬであらう。



總力戰と國民教育

著作權  
所有

昭和十七年一月二十日印  
昭和十七年一月二十五日發

刷行

配給元	發行所	製本者	印刷者	發行者	著作者
日本出版配給株式會社	目黒書店	齊藤半次郎	高橋郁	阿部仁三	阿部仁三
	東京市神田區駿河臺三ノ一 電話神田一〇五八・一〇五九 振替口座東京二八〇九 會員番號一三四〇一二	東京市京橋區西八丁堀四ノ八	東京市京橋區銀座西二ノ三	東京市神田區駿河臺三ノ一	

定價參閱

— 三協印刷 —



文藝博士 稻毛金七著  
**教育哲學**

A 5 價一六・〇〇送三〇

雄然且廣汎たる教育哲學に對し  
歴史的及論理的の二方面より體系  
化し、其發生並發達を詳にし脆  
弱なる論據に磐石をおくの書。

文學博士 山本幹夫著  
**哲學體系構成の二途**

A 5 價三・八〇送一四

本書はプラトーン主義とアリス  
トテレース主義を哲學體系の二  
途となし、その體系的基礎づけ  
を又體系構造の解釋を完遂す。

東京高等師範教授 由良哲次著  
**歴史哲學研究**

A 5 價四・八〇送二二

歴史的意識論、歴史的認識論、  
歴史的實體論の三部門としてこ  
れを究明し、歴史哲學の全貌を  
茲に論攷し盡くす好著である。

早大助教授 戸川行男著  
**民族の意志**

B 6 價二・二〇送一四

本書は心理學の觀點より、個人  
の意識・自我意志の特性を解明  
これが人生觀としての民族主義  
に發展すべき所以を指示せらる

早高教授 樫山欽四郎著  
**ドイツ精神の生成**

B 6 價二・二〇送一四

本書は西洋文化の中にありて今  
日迄獨自性を保ち來れるドイツ  
精神の本質とその純正なる姿を  
剔抉民族自體の志向を解明す。

醫學博士 杉 靖三郎著  
**生命と科學**

B 6 價二・五〇送一四

如何なる論理的科學の體系も科  
學する心なしには成立しない。  
茲に橋田門下の逸足杉博士が日  
本文化の日本科學の大道を示す



文學博士 福島政雄著

### 教育生命論

B 6 價一・八〇 送一〇

わが國體の精神と大乘佛教の精神との融合點より教育問題を内面的に考察、而して自己の體驗を通してなされたる好著。

文學博士 乙竹岩造著

### 日本國民教育史

A 5 價四・〇〇 送一四

(文部省推薦)本書は國民教育なる重大觀點より論攷せられたるもの、實に純正日本教育の根幹國民學校の沿革的背景をなす。

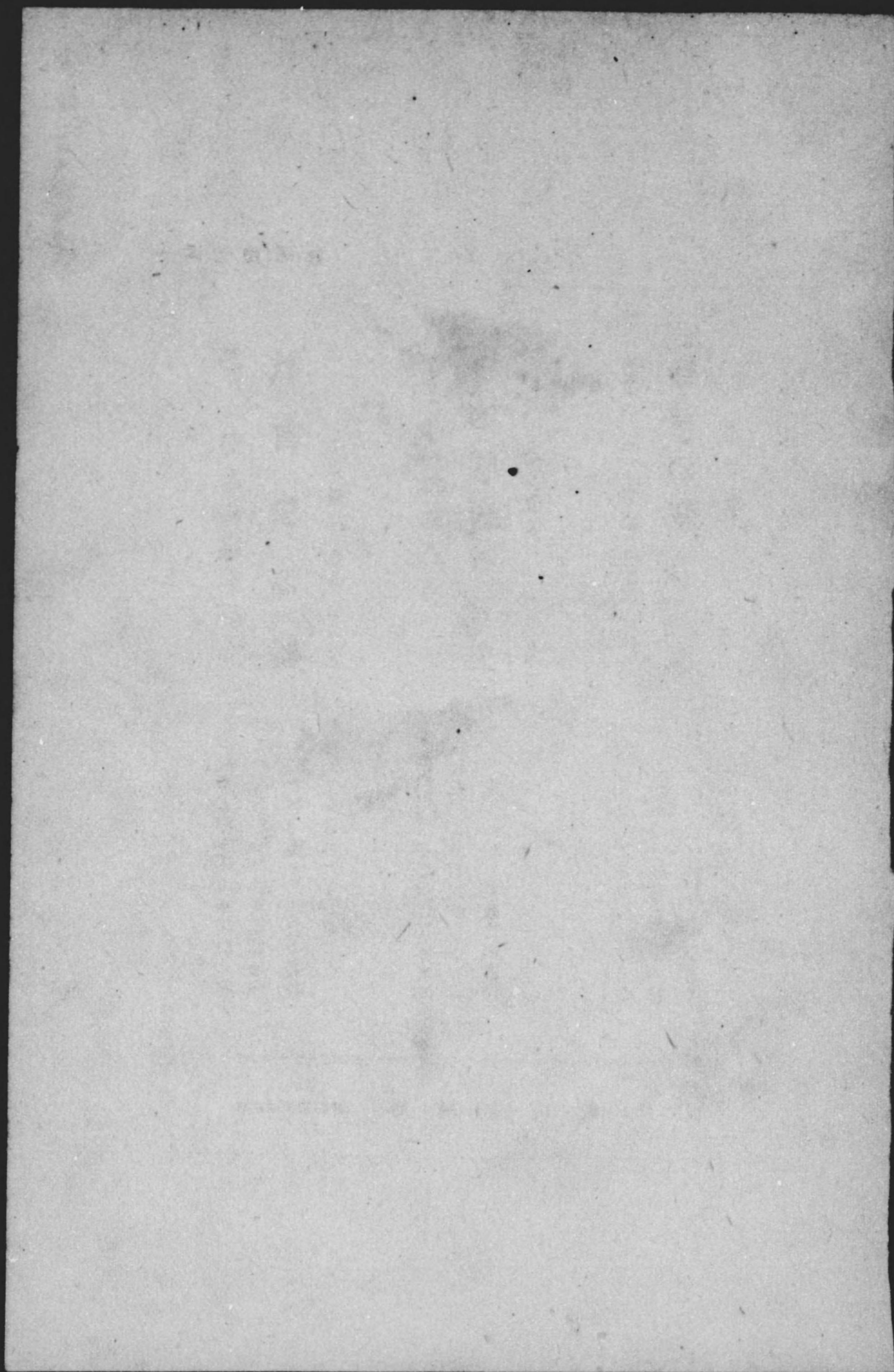
陸軍中佐 鈴木庫三著

### 教育の國防國家

B 6 價〇・八〇 送六

本書は國防目的を基準とする教育の一元的全體組織と、その統制的運営の實踐體制を提示して、教育國防國家を解明すなし。







253  
78

